

翻印  
 明治七年八月改正  
 小學讀本卷之壹

師範學校編輯  
 文部省刊行



東京橋本  
 第一山  
 四門貫三  
 大町一十  
 區三一吉  
 三十藏香  
 小六藏香  
 區番地  
 地

小學讀本卷壹釋文

北	留	追	滯	覆	球	勞	煮	什	第一
雞	傷	遣	濡	漫	擅	普	菓	器	地球
速	酷	捕	鹿	過	妨	通	漬	筆	人種
吐	害	擢	末	陷	族	授	菜	筒	亞細亞
鴨	太陽	群	毀	颺	第二	勉	蔬	衣	亞細亞
中	寢	兒	恣	經	正	強	菓	裳	亞細亞
捕	疥	戲	臥	上	中	男	植	記	亞細亞
馴	早	球	床	達	沈	兒	自	味	亞細亞
	蓄	棒	退	急	沈	戲	生	調	亞細亞
			啣	意	濕	技	業	理	亞細亞
			受	毀	乾	危	業	欣	亞細亞

憂	第五	肝	樹	毛	音	樂	傍	噪
種類	雛	便	雁	冠	樂	隊	傍	暴
多	生	枯	高	第	管	鍛	息	親
種	長	草	船	四	服	鍊	體	切
概	頸	載	炮	人	紗	兵	屈	躑
數	脛	運	門	形	小	隊	步	倒
多	涉	耳	採	弄	鶴	行	行	執
夜	水	嗅	暴	倦	棘	列	途	導
半	鳥	味	風	店	營	唱	上	任
竊	眠	言	被	娘	礪	沿	徐	携
	教	語	上	損	天	逃	壯	路
	師	心	着	密	然	性	健	
	傍	心			然	性	日	

特26  
466

~~特46~~  
~~406~~

小學讀本第一

第一

凡地球上の人種  
五又分はあり、  
亞細亞人種、歐羅  
巴人種、馬來人種、  
亞米利加人種、亞  
弗利加人種、是也

讀本一



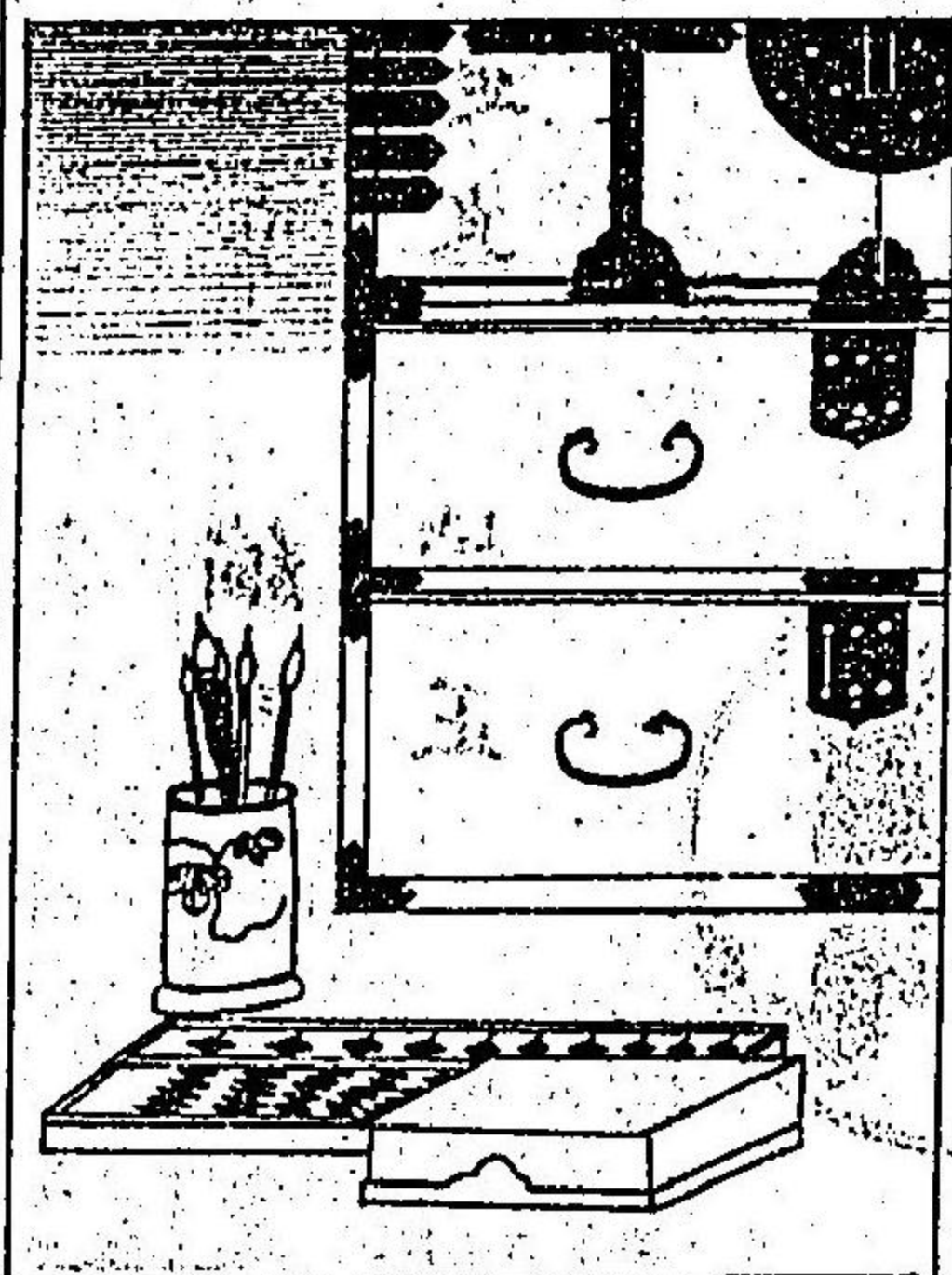
田中義廉  
那珂通高

編輯  
校正

完價十五錢

一甲

り日本人ハ、亞細亞人種の中ナリ  
 人ハ、賢きものと、愚なるものとあるハ、多く學ぶ  
 と學ぶざると、由りてナリ、賢きものハ、世ニ用  
 ぬられ、愚なるものハ、人ニ捨てらるること、常  
 の道ナキハ、幼稚のときより、能く學びて、賢きも  
 のとナリ、必無用の人と、ある  
 ことあるも、  
 幼稚のときハ、先、日用什器の、  
 名を記して、其用の方を、知る  
 べし。○筆ハ、字を寫し、又畫を



寫具ナリ、○算盤ハ、物を數ふる、用ニ供テ、○文  
 庫ハ、書籍を納る、箱ナリ、○筆筒ハ、衣裳などを  
 入る、器ナリ、○又平生食べきもの、名を記し、これを調理  
 して、食物と、おき法を、知るべし  
 ○食物と、おきべきもの、種  
 々ナリ、  
 第一ハ、穀物ナリ、○穀物ト、  
 稻、麥、豆、粟、黍の類をいふ、○此  
 等ハ、皆田苗ニ、作りて、其實を



取、或ハ炊き、或ハ炙りて、食物とせるなり、  
 第二ハ、肉類ふり、○肉類トハ、魚鳥獸肉の類をい  
 ふ、○此等ハ、或ハ炙り或ハ煮て、食物とせるなり、  
 第三ハ、菓あり、○菓ハ、葡萄、梨、梅、桃、柿、橙、蜜柑の類  
 をいふ、○此等ハ、多く生よて  
 食し、又鹽よ漬けて、食物とせ  
 るもあり、  
 第四ハ、菜蔬の類ふり、○此等  
 ハ、畠よ植よ作るものト、野よ  
 自生よるものトあり、○多く

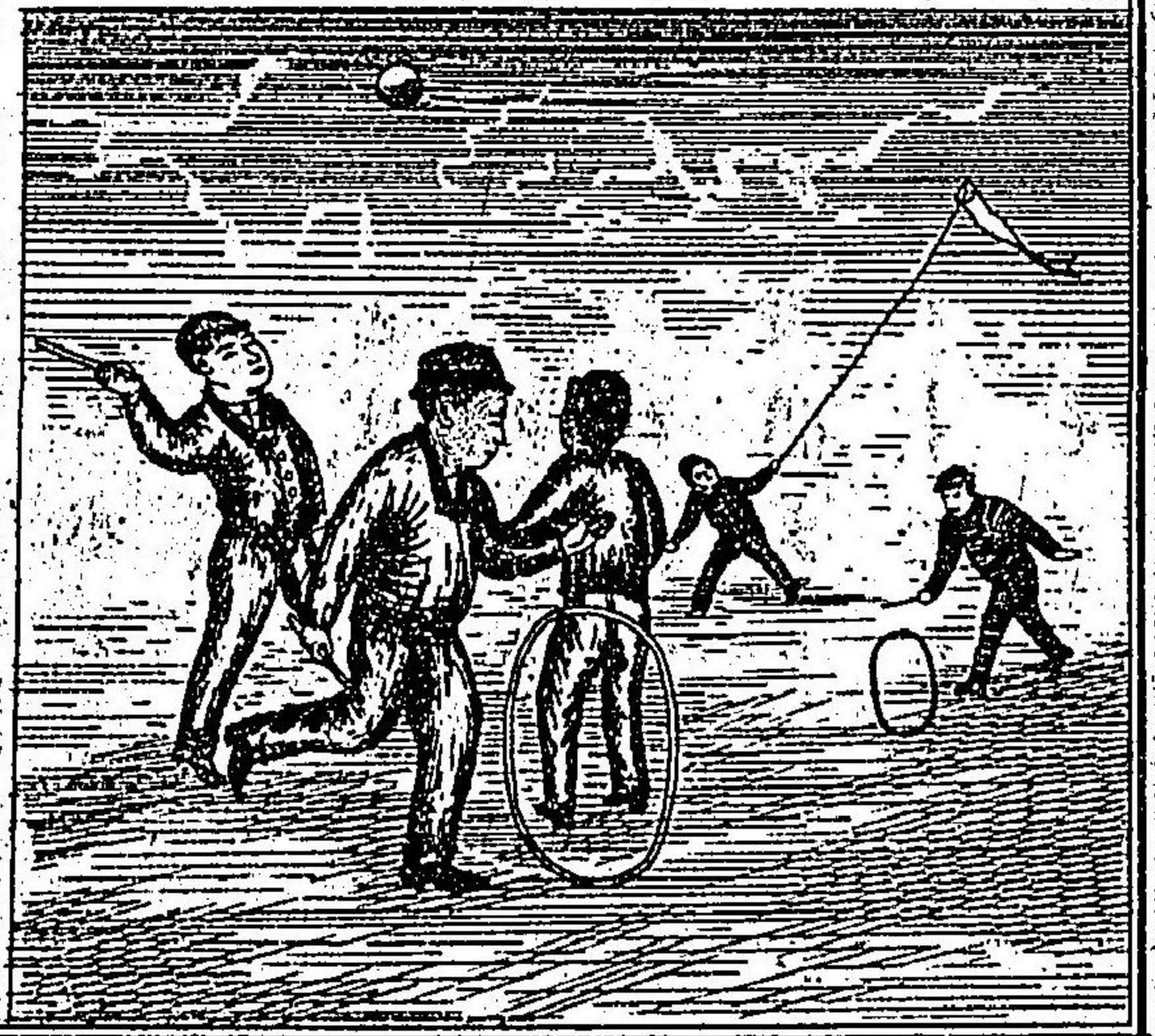


ハ、煮て食し、又鹽漬とせるものなり、○凡そ菜ハ、葉  
 と根とを、食物トシ、又實を食物トするものなり、○  
 此の如く、平生用ゐる、食物、什器をバ、能く心を留  
 めて、怠ることふらせ、  
 人の業よハ、種々ありて、其學ぶべきところ、各異  
 あり、然れども、先、書を讀み、字を寫し、物を數ふる  
 ことを學ぶを、第一の務トシ、これを、普通の學ト  
 いふ、○この學を、為さざれば、何事の業をも、習ふ  
 こと能はず、  
 故に人ハ、六七歳ハ至學ハ、皆小學校ハ入りて、普

通の學に從ふべし、○小學校ハ、士、農、工、商とも、必  
 學ぶべきの業を授けし所なり、  
 學校に到りてハ、何事も、一心は、師の教に順ひ、勉  
 強して學ぶべし、  
 何事を學ぶにハ、勉強を第一と爲、勉強せざれば  
 學問は上達すること能はず、  
 一事にても、記し得ざる所ハ、能く心を用ゐて、忘  
 ぼべからず、  
 初は、多量に記せんと欲せば、却て忘るものお  
 り、故に怠るハ、後悔は、一事を、記し得て、忘れざら

ときハ、其記し得ざる所の事、自歳と共に積るが  
 て、多きに至るべし、  
 他人の、一も讀む所ハ、百たびも、これに讀み、他  
 人の、千たび習ふ所ハ、千たびも、これを習ふべし、  
 ○斯の如く、勉強して、怠りなければ、必多く事を  
 記し得らるべし、  
 ○愚あるものも、多く事を  
 記し得るときハ、無用の人たることを免さべし、  
 學校にてハ、授業の暇は、遊歩の時間あり、○此時  
 間ハ、遊歩場に出で、身を動かし、心を慰むべ  
 し、  
 ○怠れ、勉強したる後ハ、遊歩するハ、あと

樂となるものなり、  
 故に遊歩を樂とせんとか  
 らむ、授業の時間、怠ふ  
 勉強もべし、  
 遊歩場に出で、男兒の戲  
 る、技ハ種々ありきども決  
 して危き遊をばなげべし  
 らば、○輪を廻へし紙鳶を  
 飛びし球を投ぐる等を宜しとす、○朋友相集り  
 て遊ぶときは、自擅おして他人の樂を妨ぐべか



らず

女子の遊ハ男兒と異りて、  
 走り旋るふどの戲をハふ  
 べからば、○朋友を伴な  
 いて、遊ぶ時ハ、心を和らげ  
 て、何事も親しくせべし、

第二

我等ハ、河の中にて遊ばんど、岸の邊ハ、水淺き  
 ゆゑ、水に入りて、遊ぶことを得べし、○河の正  
 中ハ深きゆゑ、遊ぶべからば、若し深き所ニ沉



むとき、復出づること  
 能はざるべし。○汝の衣  
 裳、濕ひたまへ、陸上  
 りて、これを乾かべし。○  
 汝、この小舟に、乗らん  
 とすなり。○小舟に、覆へ  
 り易き故、漫々乗るべか  
 らば、むしろ過つ時、水に  
 陥りて、其命を失ふこと  
 有るべし。



此兒、新しき紙鳶を持てり。○彼が糸を持ちて、



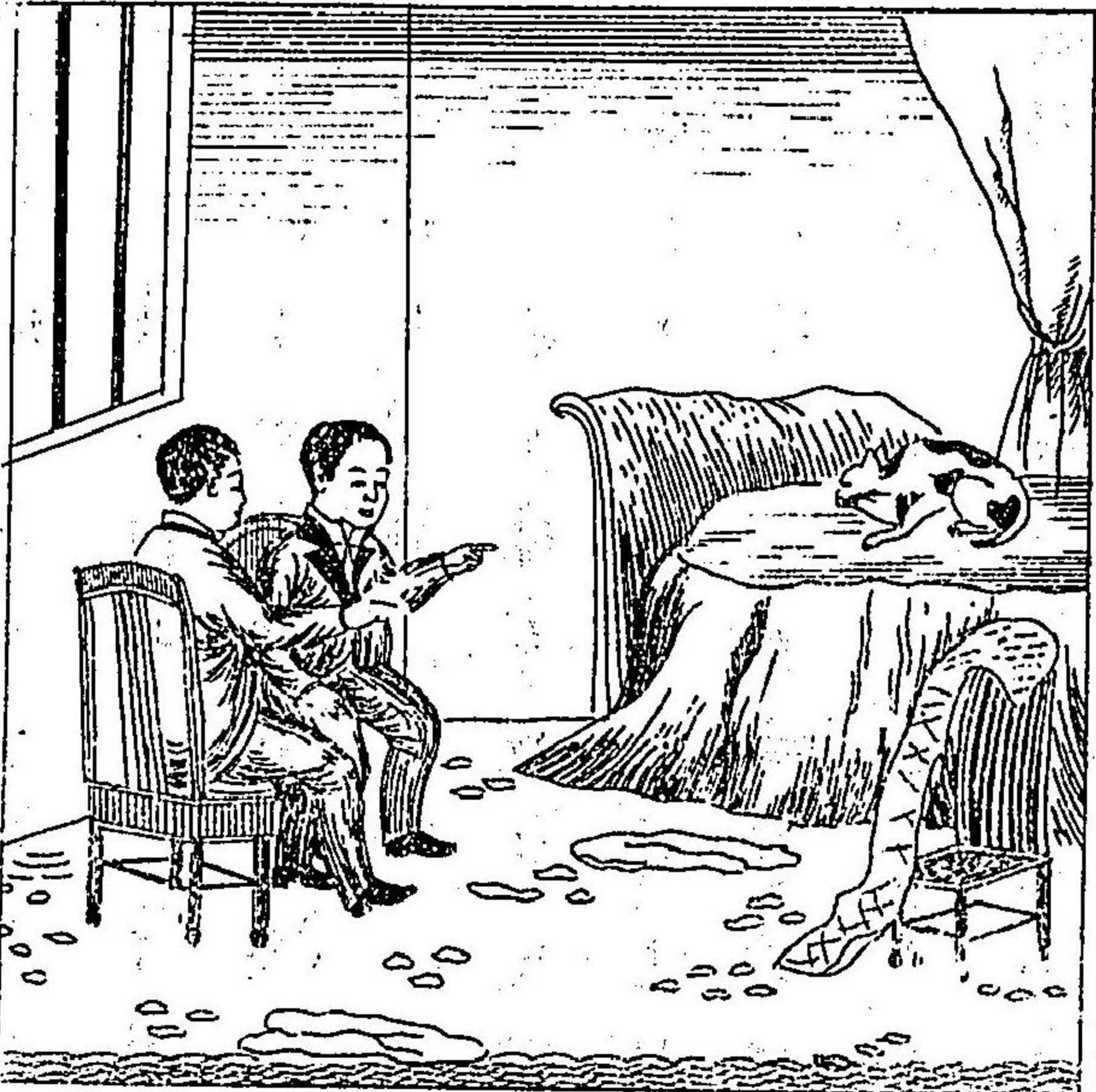
走るを見よ。○彼、紙鳶  
 を高く飛ばせんと、思ふ  
 あり。○汝、紙鳶の尾  
 を、欲するなり。○紙鳶の、尾  
 り、よるときは、能く心を  
 用ゐよ。○糸の樹に、纏ふ  
 こと、有るべし。  
 彼、新しき帽を持てり、  
 其舊き帽、破きよるゆゑ、  
 新しき、買得たり。



かり ○新しき帽をバ、心を  
 用ゐて、或ハ毀り、或ハ濡す  
 べからば ○凡て、新しき時  
 より大切ニ持て、後まで  
 も破れ難し故ニ、何物も  
 も、鹿未ニキベからず、若心  
 を用ゐざりて、毀つこと  
 ば、その罪を、免るべから



此猫を見よ、恣ニ、卧床の上ニ、坐せり、これよき猫



をバ、許さべらば、○汝ハ、此猫ハ、鼠を捕るを見

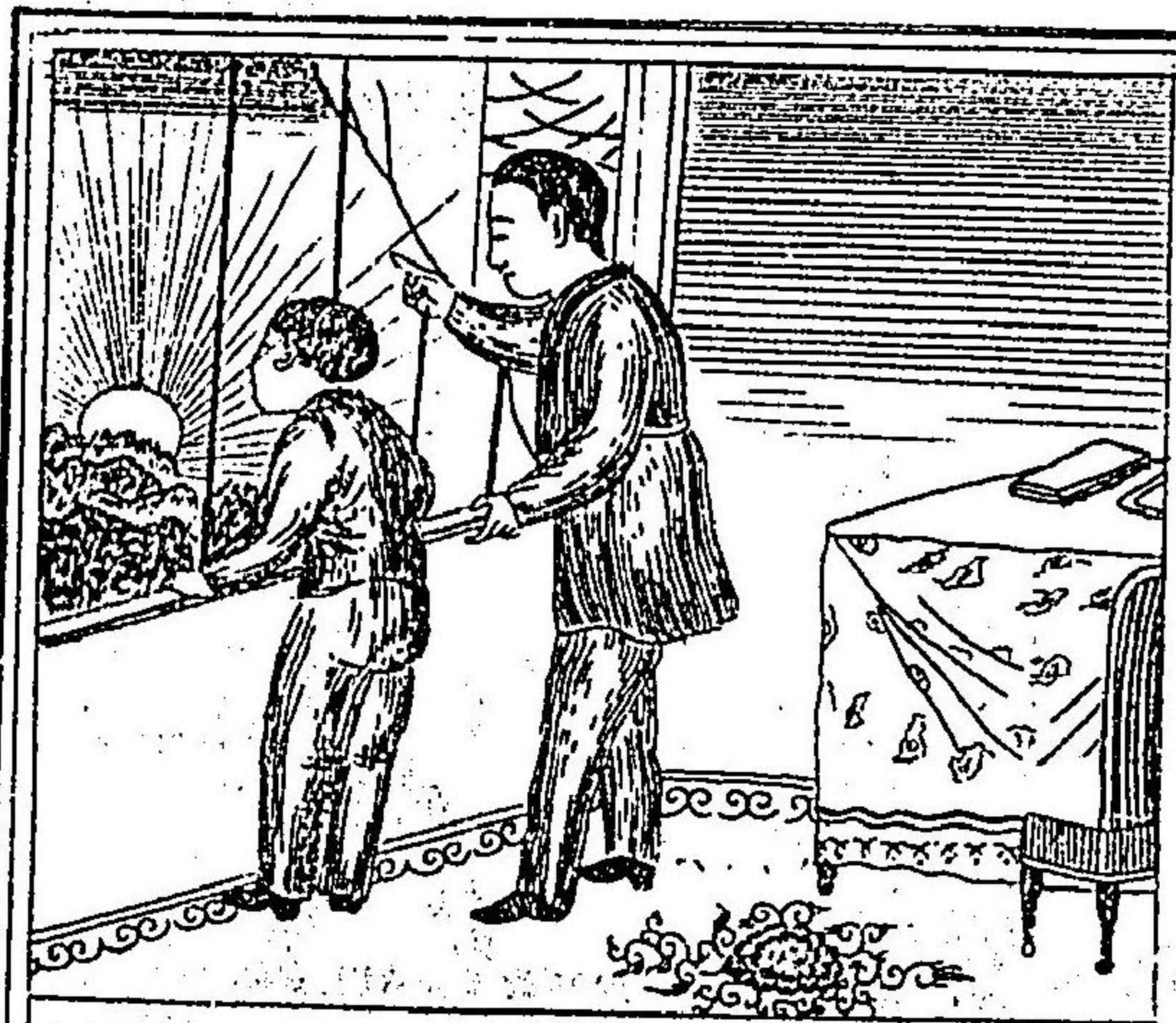
此猫を見よ、恣ニ、卧床の上ニ、坐せり、これよき猫  
 と追ひ退くることを  
 得べしや、○否、手を出  
 さバ、必猫ニ、噛まらるべ  
 し、○猫ハ、他所ニ、追遣  
 るべきや、又此所ニ、留  
 め置べきや、○猫ハ、此  
 室の中ニ、留め置と雖、  
 卧床の上ニ、上ること

たりや、○見たり、夜間、鼠を捕ふること、屢なり、  
 汝ハ、小舟ヲ、乗せし人を見  
 たりや、彼ハ何如し、て、其  
 舟を、行つや、○彼ハ、權を以  
 て小舟を、漕けり、  
 群兒、相集り、球を投げて、遊  
 び居たり、○彼等の棒を持  
 して、ハ、投げし球を受留  
 るを以て、樂とせしなり、若  
 其球を受留ること、能ハざ



等の、起き出づべき、時の來きなりと思ふべし、

る者をハ、負とせしあり、○  
 此球ハ、柔し、て、堅きもの  
 一、何らざるゆゑ、人の中り  
 ても、傷くことあり、○此ハ  
 善き遊ぶれども、熱き日  
 ハ、早く、これを止めよ、酷  
 き熱さに觸るるときハ、身  
 を、害ふを以てなり、  
 太陽の、昇りたるときハ、我



○大陽の昇りたる後までも、猶寢所又、卧をこと  
 つかま、○茂等ハ、大陽をバ、見ることを得まども

八乙

其出づるを、見ることなり、○  
 汝ハ、大陽の、赤きを見たるこ  
 と何りや、大陽の、赤きときハ、  
 大抵、早きものなり、  
 此ハ、林檎の樹なり、○汝ハ、  
 此樹の、蕾を見たりや、○此樹  
 ヌハ、紅き蕾、満てり、○此蕾を  
 ハ、取るべからば、○暫過ぐレ

バ、其蕾、皆開き、美しき花  
となるのみならず、後  
ハ實を結びて、其味甘き  
果となれハあり、  
彼兒ハ牝雞を養へり、○  
雞ハ、穀物を、食すること、  
速なり、○これ、噛むこと  
ふくして、食するが故  
なり、然もども、其穀物を  
腹に、噛み下ださざりて





第三

彼女ハ、鳥を捕へて、籠ニ、入を置けり。○此鳥も、馴れ  
まじりや、又時とて、ハ、噪も暴るることあり

唯喉の下なる、袋ニ、入を置  
き、夜間ニ、再吐き出さして、  
始めてこ北を、腸中ニ、噛み  
下さむのなり、



めり、○此鳥ハ、籠より、出づること願へり。○  
若籠より、出づるとも、再歸り來るべきや、又共  
まに飛び去るり。○凡て鳥ハ、自由ニ、山林ニ、遊ぶ

ことを好む故に、籠より出づることを願ひ、一度  
 出づれば、再歸り來ることなし、  
 我も、惡しき小兒を好まざ  
 るゆゑ、これを遠ざけんと  
 す、○惡しき小兒又ても、吾  
 は、これを打ち傷くること  
 あり、然もども、共遊ぶこ  
 とを、好まざるあり、  
 彼子ハ、彼小女の為に、親切  
 ありや、○然り、彼子の、  
 親切あることハ、小女の、躓  
 き倒るる為に、手を





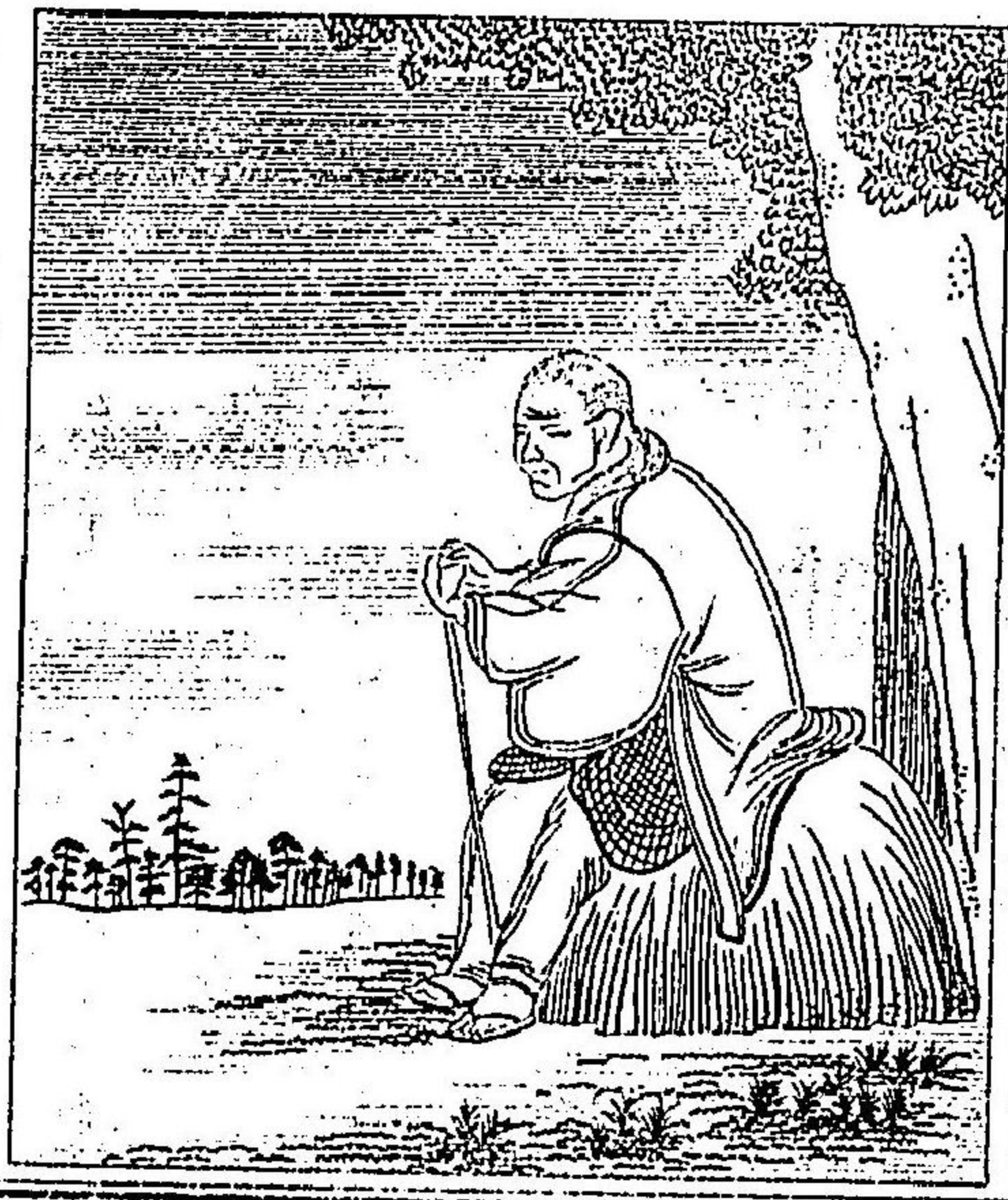
ことおまきを知りて、これを任せたる由是、親  
 切し、導きて、家又在ると、同しく、安全あらむる

讀本一

十一

執り導くを見ても知るべ  
 〇彼一人ハ道し、迷ふべ  
 き、〇否、彼子ハ能く道を  
 知るゆゑ、二人とも、道  
 し、迷ふことあり、〇彼等ハ、  
 林の中を過ることを恐る  
 る、〇否、恐るることあり、  
 〇小女の母ハ、彼子の恐る、

ふり、○若し又家へ歸らん  
 ときるときは自在に歸  
 り得らるべし、  
 汝は杖を携へて、老人  
 を見たるは、○彼老人は  
 路傍の石の上へ息ひ、其  
 手を杖の上へ置き、○  
 彼の顔と、其白髪なるは由りて、  
 又年老たるは由りて、體の屈みたるを  
 知り、○  
 何れ由りて、彼は杖を携ふるや、○  
 老人へ杖の爲



は、歩行も杖を以て、歩行し難し、○彼は、年老と  
 きども、起つことと、歩行もること、得べし、然き  
 ども、急ぎ走ることも能はば、時  
 々、途上へ休んで、息を續ぎ、杖  
 に頼りて、徐に歩行するなり、  
 爰に五人あり、○汝は、此人の  
 年老たるを、知まらば、○此人  
 は、白き髪あまば、老人あるべ  
 し、○此人等へ、手へ杖を持ち  
 たる、老人と、同じく、年老たり、



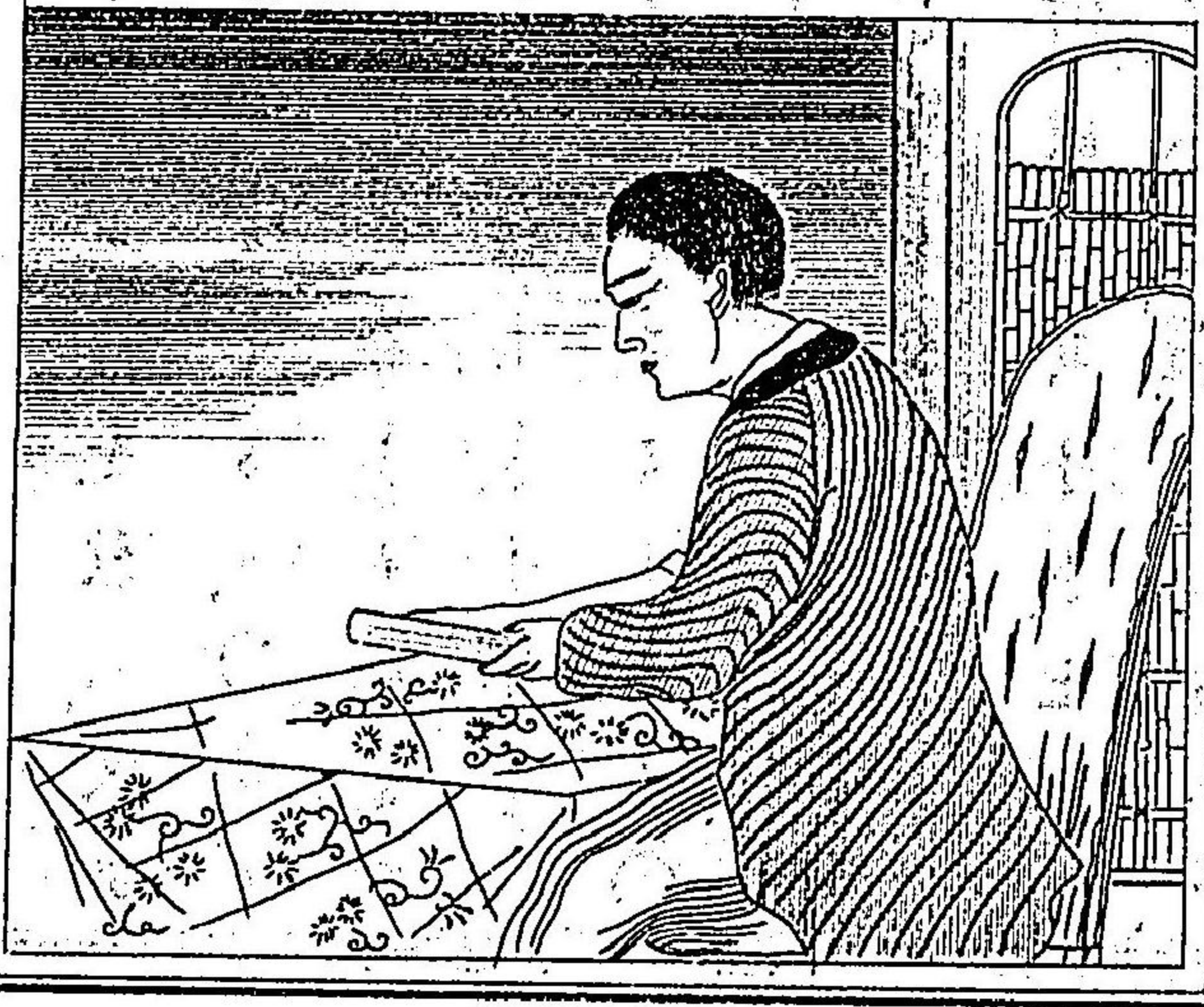
○然きども、其身へ、猶壯健ふるゆゑ、杖を頼ら  
ぎ、て、自在に、歩行せることを得るなり、



此笛ハ、管長くして、

彼等の持たる笛の名をバ  
何といふぞ、○此ハ、喇叭なり、  
○彼等ハ、樂隊の、兵卒ゆゑ、  
此笛を吹くことを鍛錬する  
なり、○此笛ハ、兵隊の、行列を  
整ふる、合圖を用ゐ、又ハ、祝日  
の、音樂に、用ゐるものなり、○  
先、の開きたるものゆゑ、  
聲

を發せりこと、最大なり、  
 汝ハ、此人の、服紗の中ニ、あ  
 るものを、書冊なりと、思ふ  
 〇否、これハ、巻物なり、〇  
 然らば、書冊の、次第を數ふ  
 るとき、何故ニ、卷一、卷二と  
 云ふや、〇この、唱ハ、漸ニ、轉  
 れるなり、古ハ、只巻物ニ  
 一、書冊ふらざりゆるニ、卷  
 一、卷二と呼びとり、其後、今  
 の書冊、出來りて



も、猶昔の唱ゝ浴ヶへるふり

良き老人ハ、我々好、又隨ひて、問ふ所を、教へ、又能

く小兒を愛する、○然り、

彼ハ、小兒の、善きものを、愛

せれども、惡しき、小兒をバ、

決して愛することな、○

善き小兒おきバ、好きて、何

事をも、教ふるあり、

汝ハ、此女子を見らる、○何故、其手を、上げて

とるや、○彼女子ハ、籠ゝ鳥を、入を置き、れども、



心を用ゐること、深からざ  
る故、鳥を養ひ得、彼籠  
を持と、即其鳥、逃げ去りて、  
直、林の中、飛び入りた  
るなり、○此とき、驚きて、手  
を舉ぐとも、再捕ふること、  
能はざれば、何の用も立  
つべからば、○彼の鳥を、逃  
がしたるを、吾ハ却て、  
甚喜べり、鳥ハ、自由なることを、好むものなれば、  
なり、





上、遊ぶ、天然の性、此れを捕へて、苦むる、善きことと知らるる、

汝へ鳥の性を、知る、  
鳥へ、木に在ること、好む  
て、巢を造り、兒を、養育す、  
鶴、鶉へ、小鳥、  
巢を營み、鶇、鶇へ、水鳥、  
水の邊、  
か、鳥へ、頭、  
も、  
林間、  
水

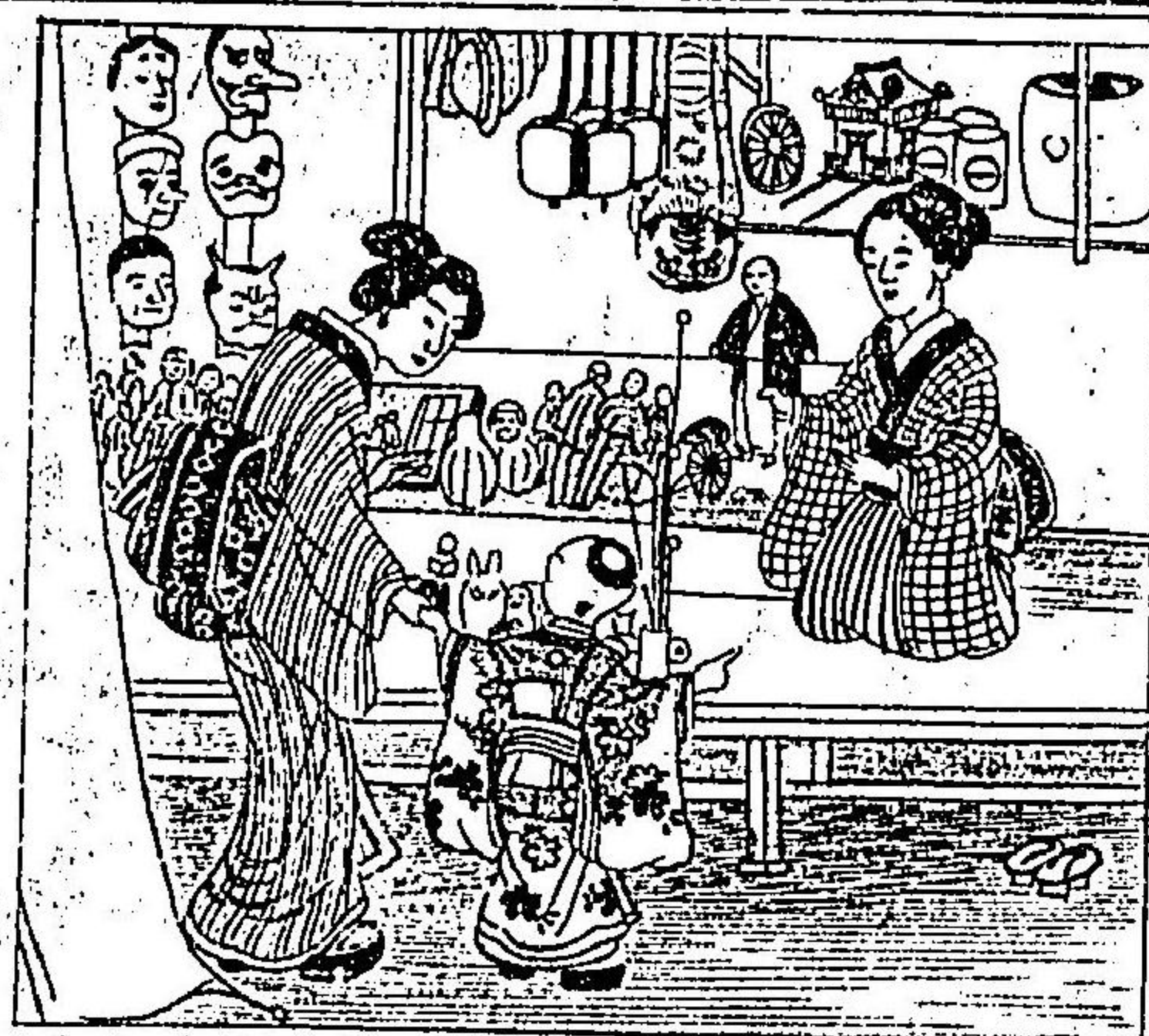
第四



此女子へ愛せむ、人形を、持て、此れ等へ、遊ぶ

宜しき、具、  
人形を、舞む、  
静、  
毀るべから

母へ、小兒、向ひて、何事の、人形を、求めんと、  
やと、問ふ、小兒、自好む所を、指し、示せ、  
○此小兒、人形のみを、弄びて、倦めるとき、  
何事を、なほ、  
球を、弄ぶ、  
好む、



り、○此鳥ハ、眼力甚強きゆゑ、晝  
間ハ、却て物を見ること能ハズ、暗  
夜ニ、明ふること、人の能く日中ニ、



○此店ニ列ねたる品ハ、皆小  
兒ノ、好むものなれども、此小  
兒ハ、静なる娘ゆゑ、人形を  
愛して、能く心を用ゐ、これを  
損ひ毀ることある、  
梟ハ、終日密樹の枝ニをり、夜  
ニ入建バ始めテ、飛び翔るな

物を見らる如し、

馬ニ、乗せし人あり、○汝ハ、馬ニ乗ること、を好む

り、○我ハ、馬ニ乗ること、を

好めり、然も彼ノ如く、

疾く走ること、を好まば、徐

く歩まざること、を好めり、

○此馬ハ、何故ニ、疾く走ら

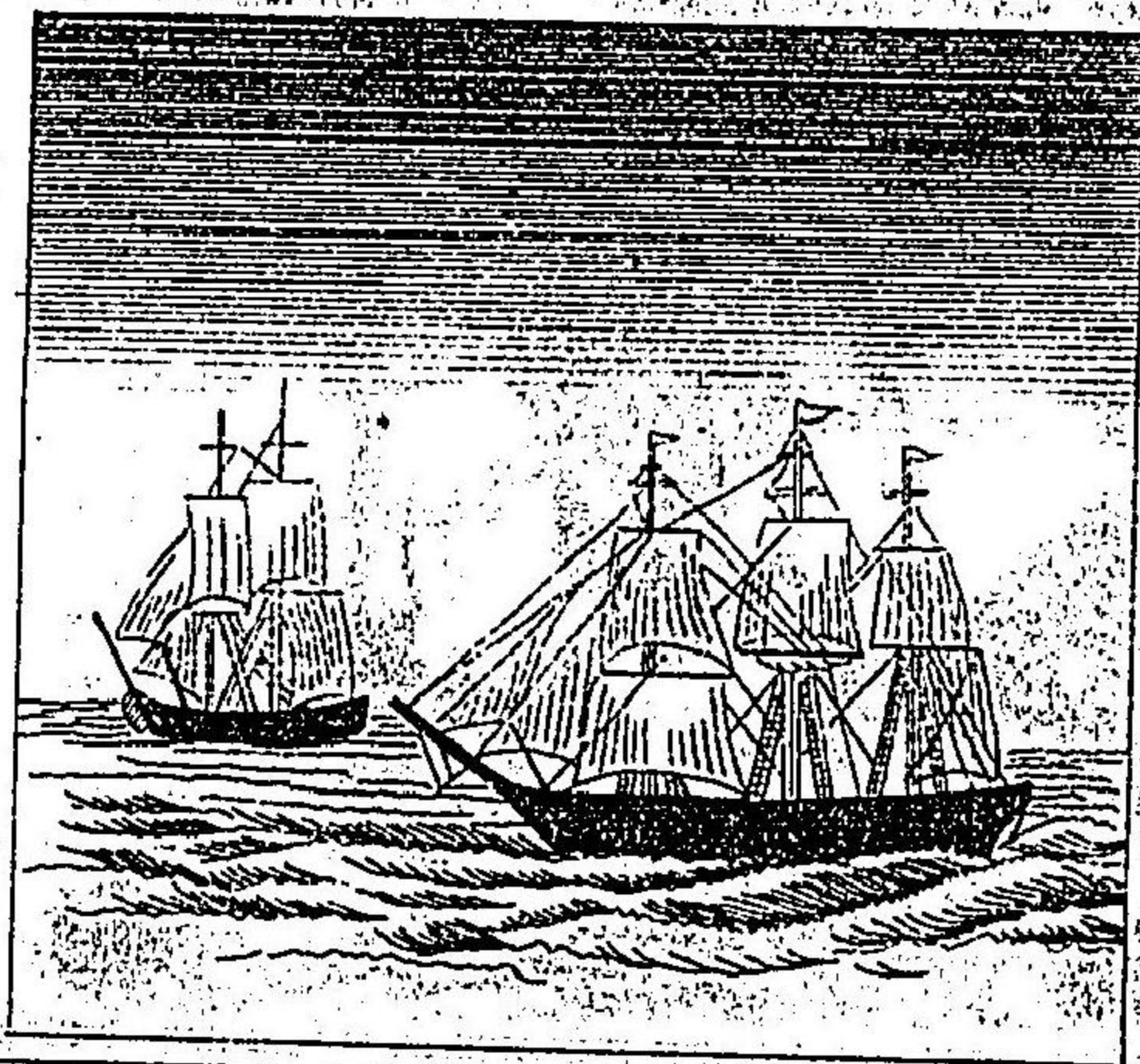
ず、○馬ハ、彼ニ、鞭うた

ゆゑ、其痛ニ、堪へざりて、

疾く走らるなり、



爰は小船と、大船あり、小船は二本の櫓あり、大船は三本の櫓あり、汝は、櫓の用を知らずや。○櫓は、凡て帆を揚ぐる為、設けたるなり、○汝は、海を渡るに、小船は乗ること、好む、○風吹きて浪の立つ時も、我は、船に乗じて、海を渡ること、好まば、其覆らんことを、畏る、ゆゑなり、○これ、蒸氣船ありや、○否、蒸氣船は、帆前船なり、



爰は、暴風の日、海上に浮びたる船あり、櫓は折れ、帆も破れて、甚危き状あり、○此船は、帆前船なり、○蒸氣船なれば、斯く難く、罹ること少からん、○これ軍艦ありや、○否、高船なり、船の腹に、炮門なきを見て、知るべし、此小兒は、幼年より、水に遊ぶこと能はば、○此小兒は、何をなさんと云るや、○こ

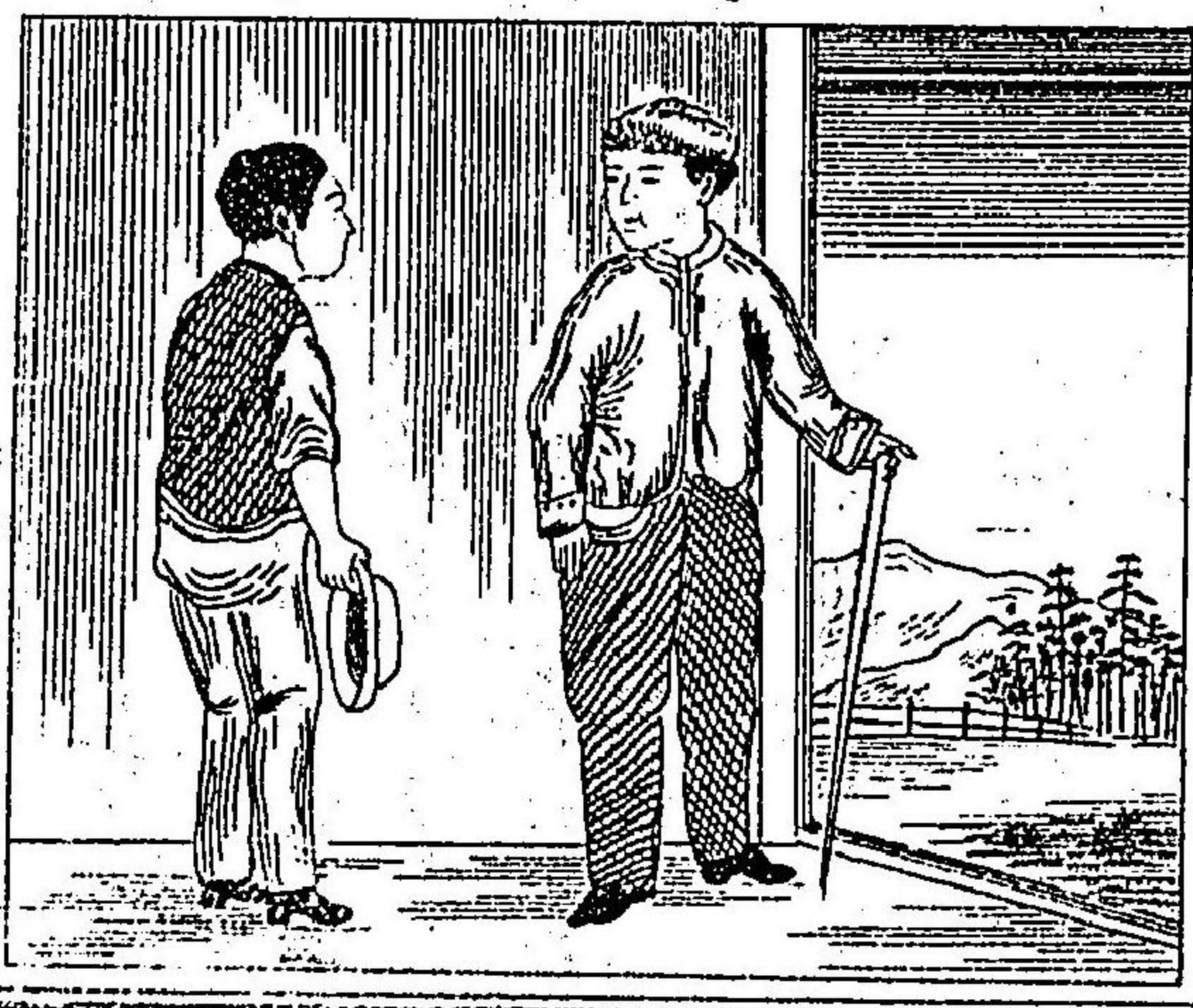


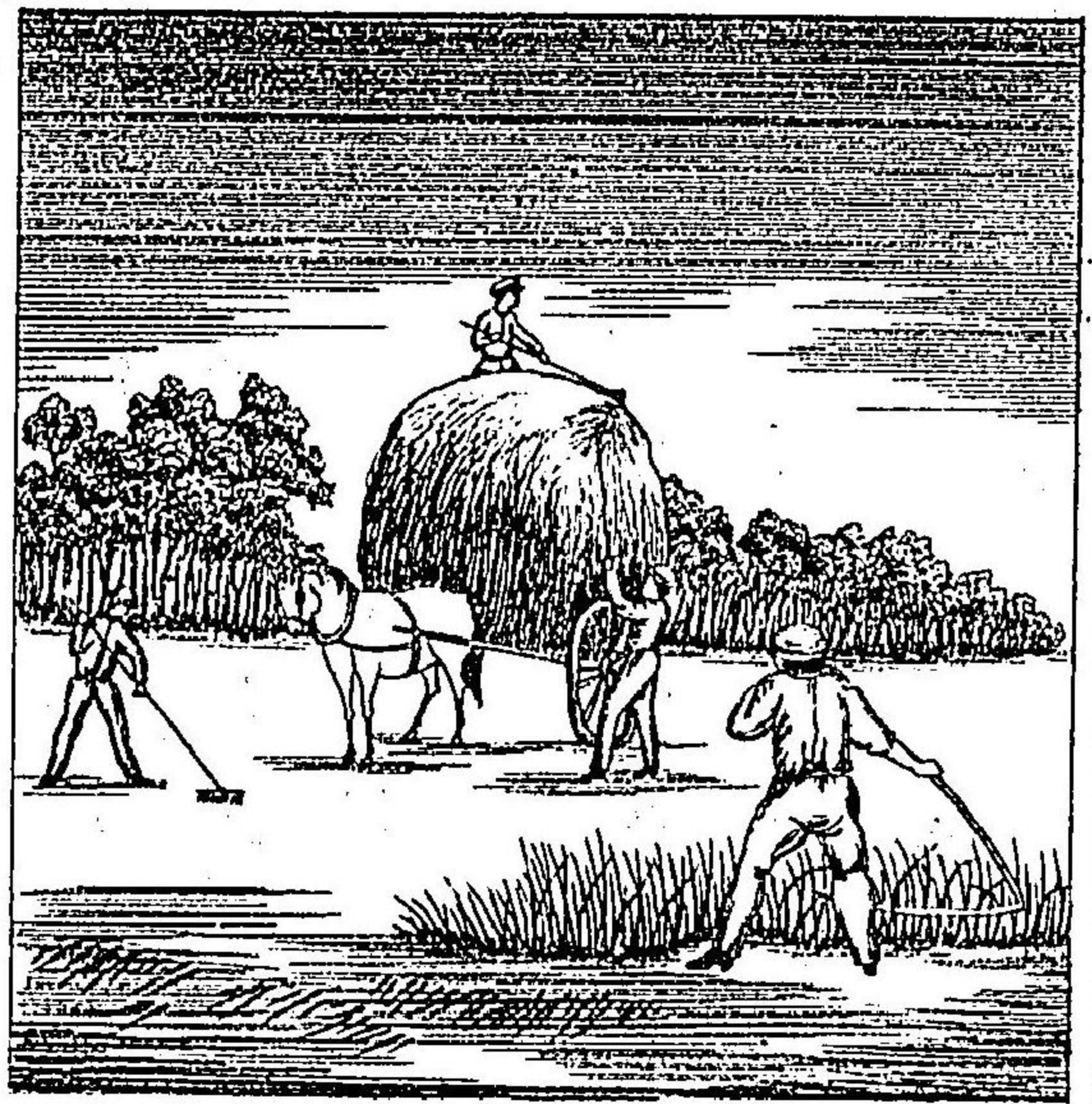


て、行かんとする状あり、○帽を、手、持ちたる人  
へ上著を、著せりて、肘を見へせり、これへ、この家

れへ、蓮の、小き葉と、大なる葉  
とを、採らんとするなり、○も  
岸より、遠く離れて、行くと  
きへ、水も、漸深くふるゆるよ、  
歸ること、能はざるべし、  
一人の男へ、帽を被りて、左の  
手、杖を持てり、○此人へ、此  
家の、主人にて、今他所へ、出で

の僕より、事をなほし、便ふ  
るがゆゑあり、○僕へ、今主人  
の、出で行きて、後にも、終日、空  
しく、暮れことを、欲せはしめて、  
其為すべき事を、問ふところ  
なり、  
人ありて、草を、積み上げたり、  
此草の、乾きこるを、枯草と云  
ふ、○枯草へ、車に載せて、これ  
を馬に、引りせ、直に、  
小屋に運び入る、○草へ、枯  
きを、乾くを、待ち速し、





ハ、香を嗅ぎ、耳ハ、聲を聞き、口ハ、食を味ひ、又思ふ  
ことを言ひ、目ハ、物を見るものあり、○鼻と、口と

小屋ニ、運び入るべし、も  
雨ニ、遇ふ時ハ、再濡  
るものあり、○此  
枯草ハ、牛馬の食と  
なり、○馬ハ、枯草と、  
麥とを食せれども、  
其最好むものハ、  
麥なり、  
人ニ、耳目、口、鼻  
あり、○鼻



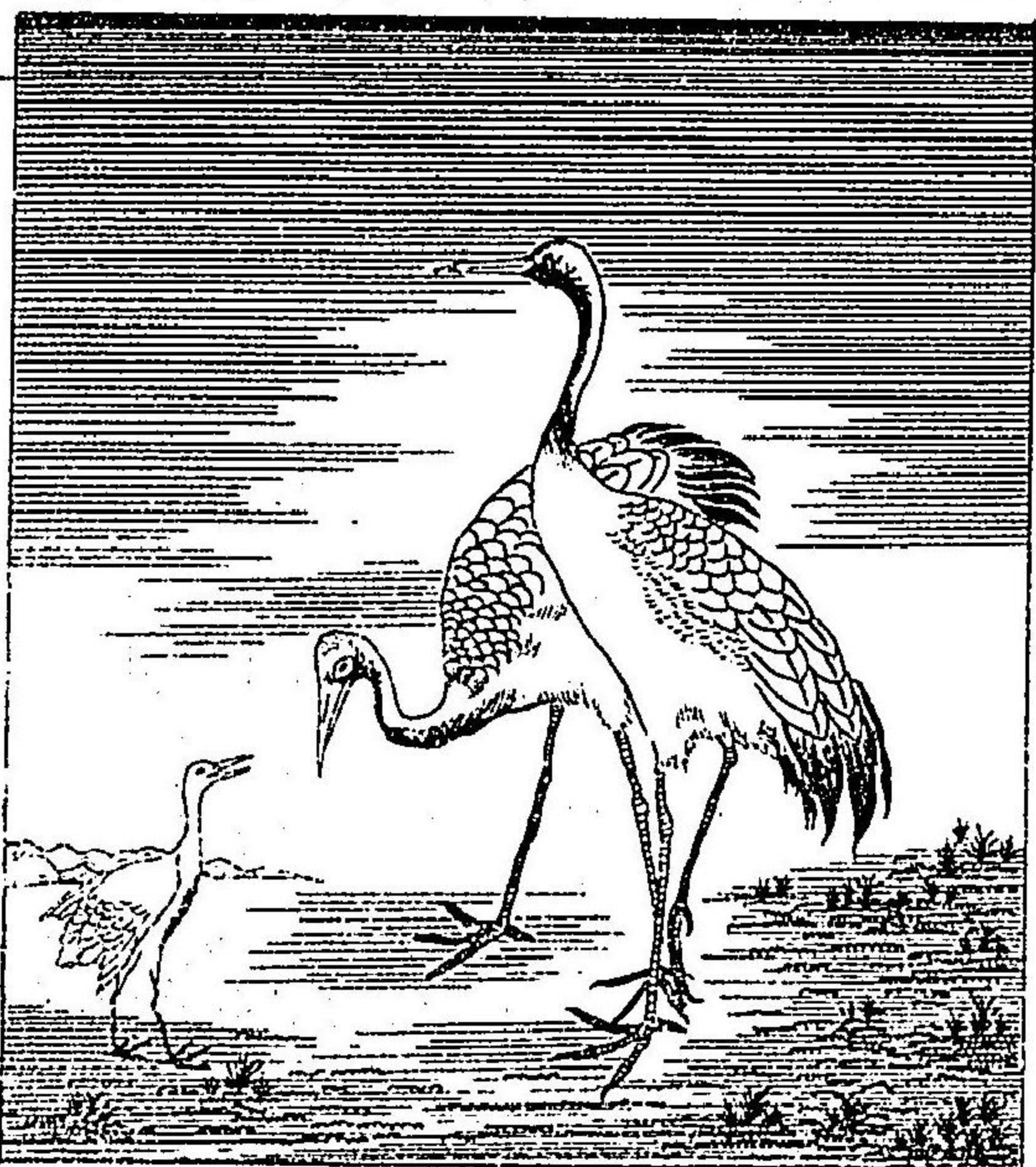
○又人ニ、ハ、二つの手と、二つの足とあり、口  
ハ、只一つあり、話せば、少くして、業をば、多く  
せむべし、

ハ、只一つあり、目と、耳  
と、ハ、二つあり、○耳と、目  
と、ハ、二つあり、口ハ、一  
つあり、見聞く如く、  
言語を多くせむべからば、

第五

鶴ハ、大なる鳥にして、雛の間ハ、其羽毛、茶色  
あり、

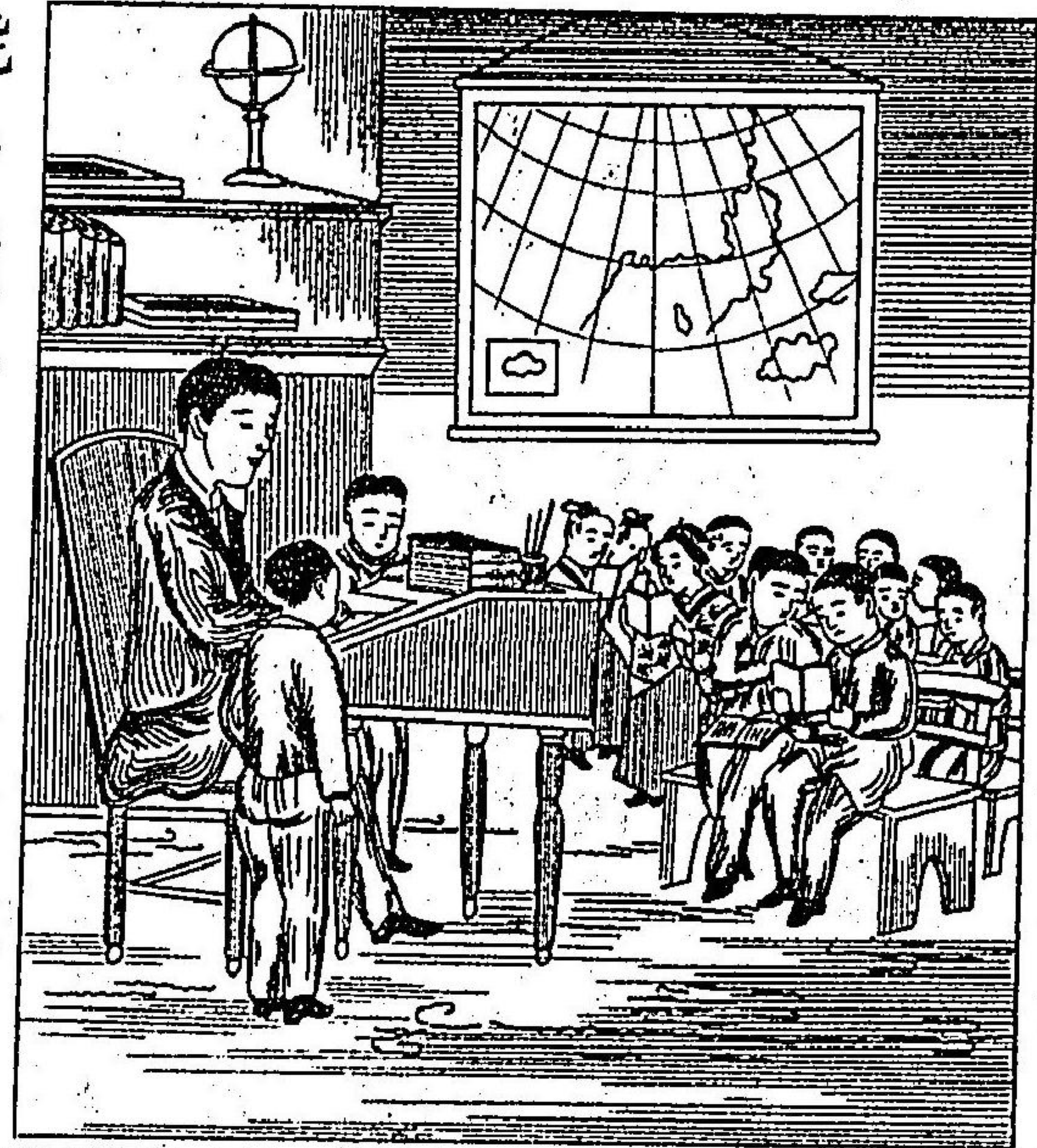




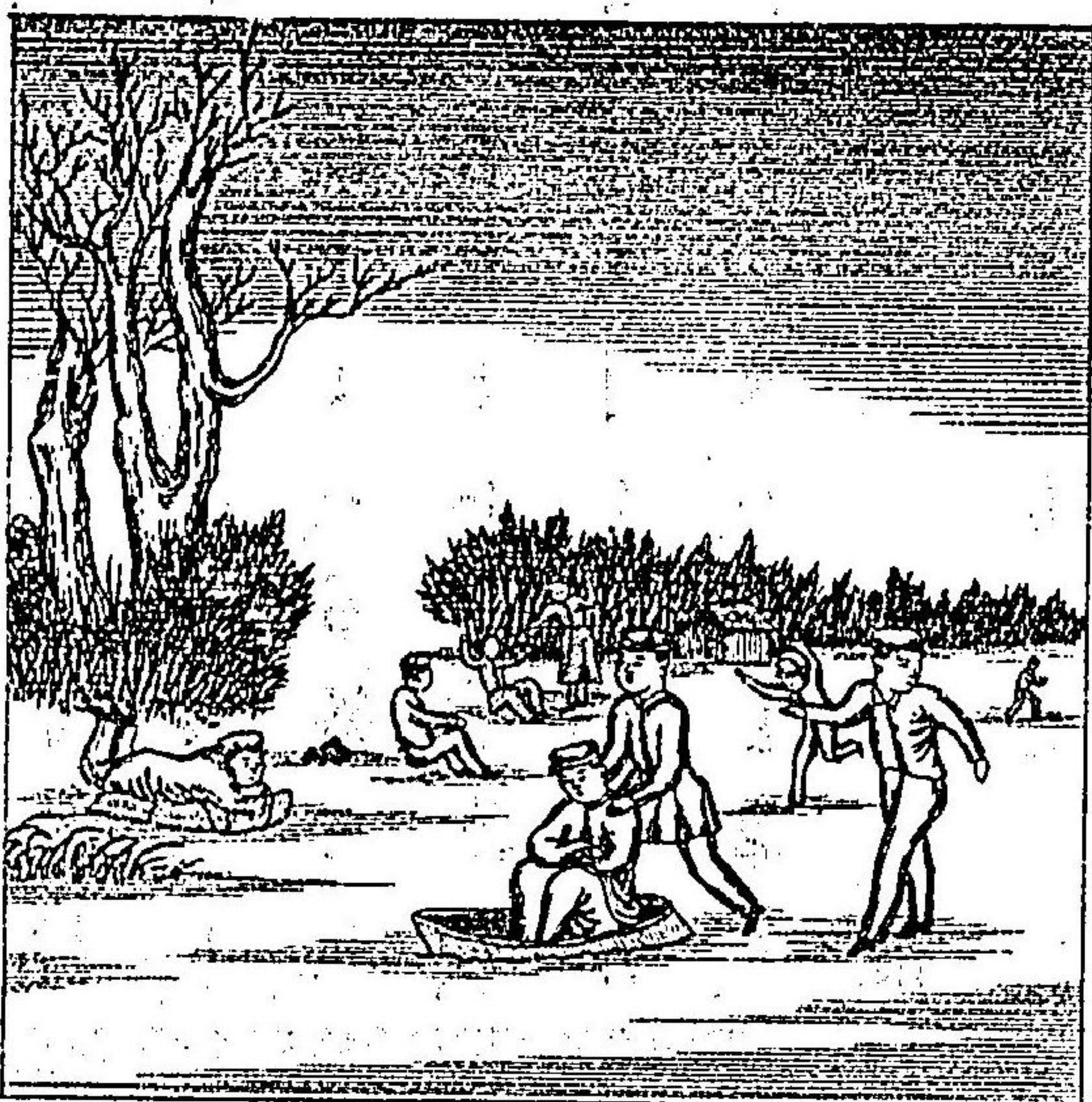
眠るゆゑなり、

ども、生長して、後ハ雪の如く、白くなるあり、○この鳥ハ、長き頸マて、長き脛あり、○此鳥の卵ハ、大マして、白きものあり、○此類の鳥を、歩水鳥といへり、淺水を歩りて、魚蟲を食とふせども、水上マへ、浮ぶことなく、夜ハ、樹上マ

學校マ、教師、入り來きり、數多の、男兒と、小女子とあり、○此小兒等ハ、皆書を讀み、字を習へり、○校中マハ、石盤と、机と、書籍とあり、○汝ハ、學校マ、行くことを、好むり、○汝ハ、書を讀み、又語を綴ることを、能くせや、○吾ハ、書を讀むことを、好めども、未能く讀むことを得ず、



今日ハ、寒き日ナリ、○雪ハ、一樣ニ、地上ニ積ルキ



只遊歩場ニ於テ、遊ぶのみ

リ、○小兒ハ、氷の上を滑  
べルことを好む、○此遊  
ハ、甚危キものゆゑ、能ク、  
心を用ゐねハ、何レベ  
ラレ、○もし、顛び倒  
ルことあらバ、身を傷ふ  
ル、○賢キ小兒モ、か  
ク、危キ遊を好むことナ  
ク、

此兒ハ、手を伸べて、卵を取らん  
とレ、○巢の中ニハ、數多の卵あ  
リ、○こまハ、鶏の卵ナリ、○鶏ハ、  
巢の傍ニ在リテ、飛び去ラズ、こ  
まハ、卵を取ラズ、こまを憂ふ  
るゆゑナリ、○鶏の卵ニ、小  
鳥のものと大なるものと有  
ル、其種類の異ナルゆ  
ゑナリ、

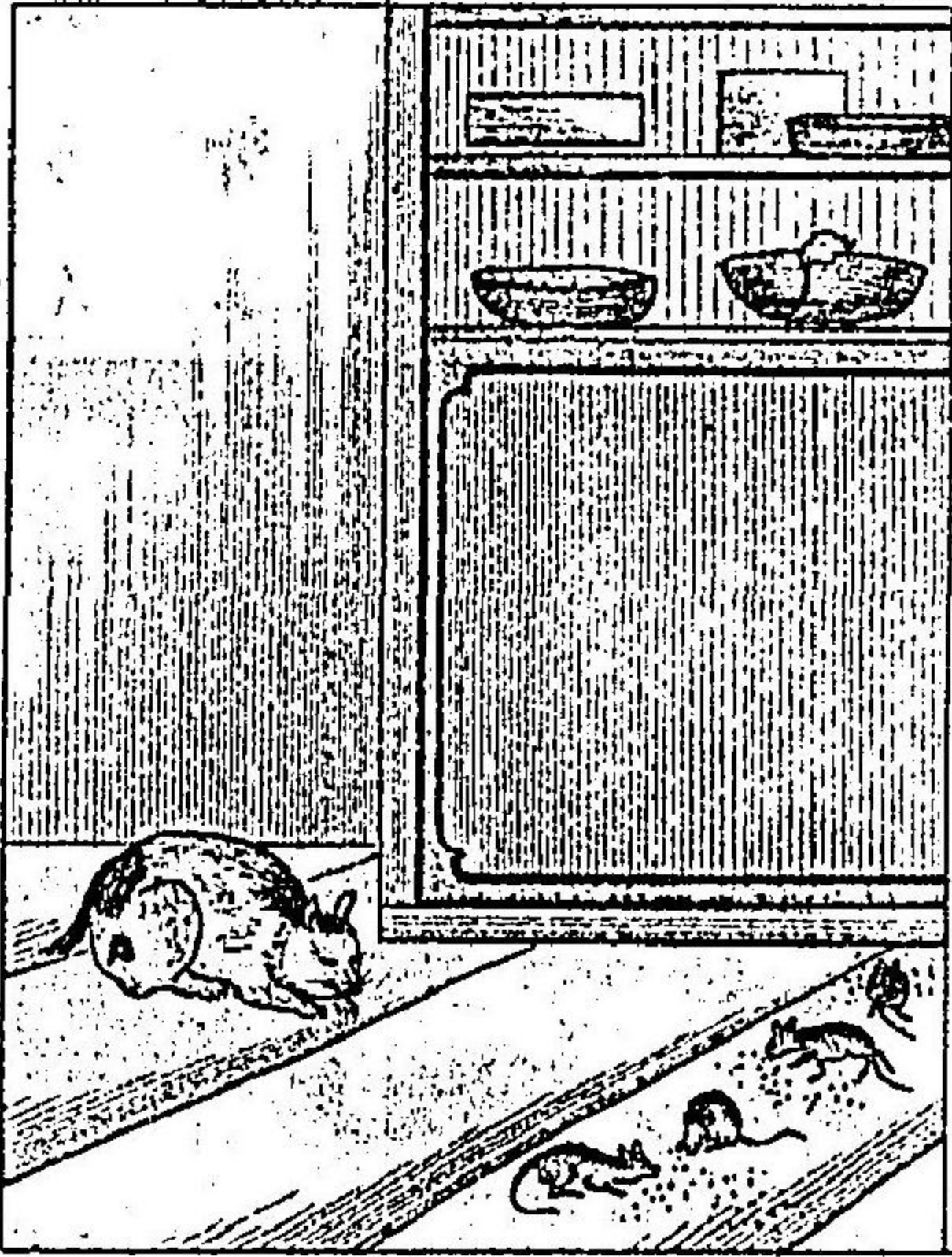


瞿麥ト、桔梗トの花アリ、○小兒ハ、桔梗の花を採  
リ、娘ハ、瞿麥の花を手ニ持テリ、○瞿麥の花モ、多



數多の鼠あり、鼠へ、日中  
 出づることあり、○夜  
 半に至りて、各出づ、遊  
 べり、○此出づ、遊ぶと  
 き、梁を行き、棚に登り、

く紅色なり、○桔梗の  
 花へ、紺色あり、瞿麥へ、  
 多種なきども、概夏、  
 花を開くあり、



厨に入りて、食類を竊り食ひ、○然きども猫の聲  
 を聞くと、驚き、一時、静まり、忽穴の中へ、

逃げ入りなり、○故に  
 猫の居る處へ、出て  
 て遊ぶことなし、  
 爰に馬車ありて、數多  
 の小兒と、女子とを載  
 せたり、○汝も、此小兒  
 と、女子とを、知さるや、  
 ○これを、知れり、○こ

此ハ、皆我學校ニ來ル人ナリ。○彼の犬ハ馬と同  
 トク走リ。○彼等ハ、汝を見たり也。○彼ハ、吾を  
 見るときハ、必其帽を脱ジ、故ニ我モ、亦其時ハ、  
 帽を脱ガザルことナシ。  
 この箱の中ニ響アリ。○汝  
 ハ、此響を何ナリト、思ふ也。  
 ○此箱の中ニ、何ナリハ、鼠ナ  
 リ。○汝ハ、猫ナラズベシ。汝ハ、何  
 ナリト、思ふ也。○この響甚  
 小ナルゆゑニ、吾ハ、小キ鼠



ナリト、思へり。○凡ニ響ハ、其物ニ應トテ、度ニ過  
 ズ。○此ハ、猫正ニ、何ナリハ、大ナル鼠ニモ  
 何ラズト、思へり。  
 爰ニ四人の小兒アリ、二人  
 坐シテ、二人ハ立テリ。○  
 一人の老人ありて、此小兒  
 等ニ、神の話を説き、聞ク者  
 んとす。○老人云ふ、凡人  
 老シテ、神を敬リテ、我身の幸を  
 願フモ、むとならば、善き道を

行ふべし、○善き心を持ちて、善き道を行ふんことを欲せば、小兒の時より、學問を勤むべし、○學問して、壯年に至り、毫も、過なきときハ、自神の助を得べし、

爰は杖を携へたる、老人なり、足も不自由にて、目も、矇く、なれり、然きども、此老人も、初ハ、小兒にて、今の汝等の如く、疾し走り、まゝ遊び戯れりなり、○今の足も、顛



も、ゆるぬるゝ、小兒の肩に、倚りて、立てり、○見よ、此老人ハ、これを、一年に、譬ふまゝ、冬の時侯の、至るなり、○汝等も、冬の時侯に、至らざらば、前ハ、學問を、勤めて、世間の利益を、考へ出さるハ、春の、萬物を、生長せらるゝ如し、せまはらるゝべからば、爰ハ、槻の大木なり、○汝は、此木の、年を経る、數を知まらば、○此木の、年を経る、數を知らんと、を欲せば、横は、切りて、木理の輪を、數へ見



年毎又、一つの外へ、生ぜざりしものなれハ、輪の數  
 又て、其經る年、の數を、知らるゝなり。○木理の  
 輪ハ、大概、木の心より、増えしものなれども、希ハ、  
 外面より、増えしものあり。



汝等、毎朝、早く起きて、神を拜  
 し、先、今朝まで、無難又、過き  
 ず、神の賜あり、かゝり夜明  
 くる毎、日光を、給ふより、  
 父母の、恙なき顔を見、こと  
 を、得る也、皆、其恩あり、と、謝

ハ、○さて、其後、又、吾を、導き、幸を、與へ、必、過、無  
 かり、めんことを、祈るべし。

第六

此人等ハ、小舟に、乗じ、網  
 を、以て、魚を、捕り、海濱に、  
 歸するなり。○網を、海上  
 に、引きて、魚を、捕ふると  
 きハ、鱗あるも、鱗なきも、  
 大なるも、小なるも、同ト  
 し、其中、入らざるもの



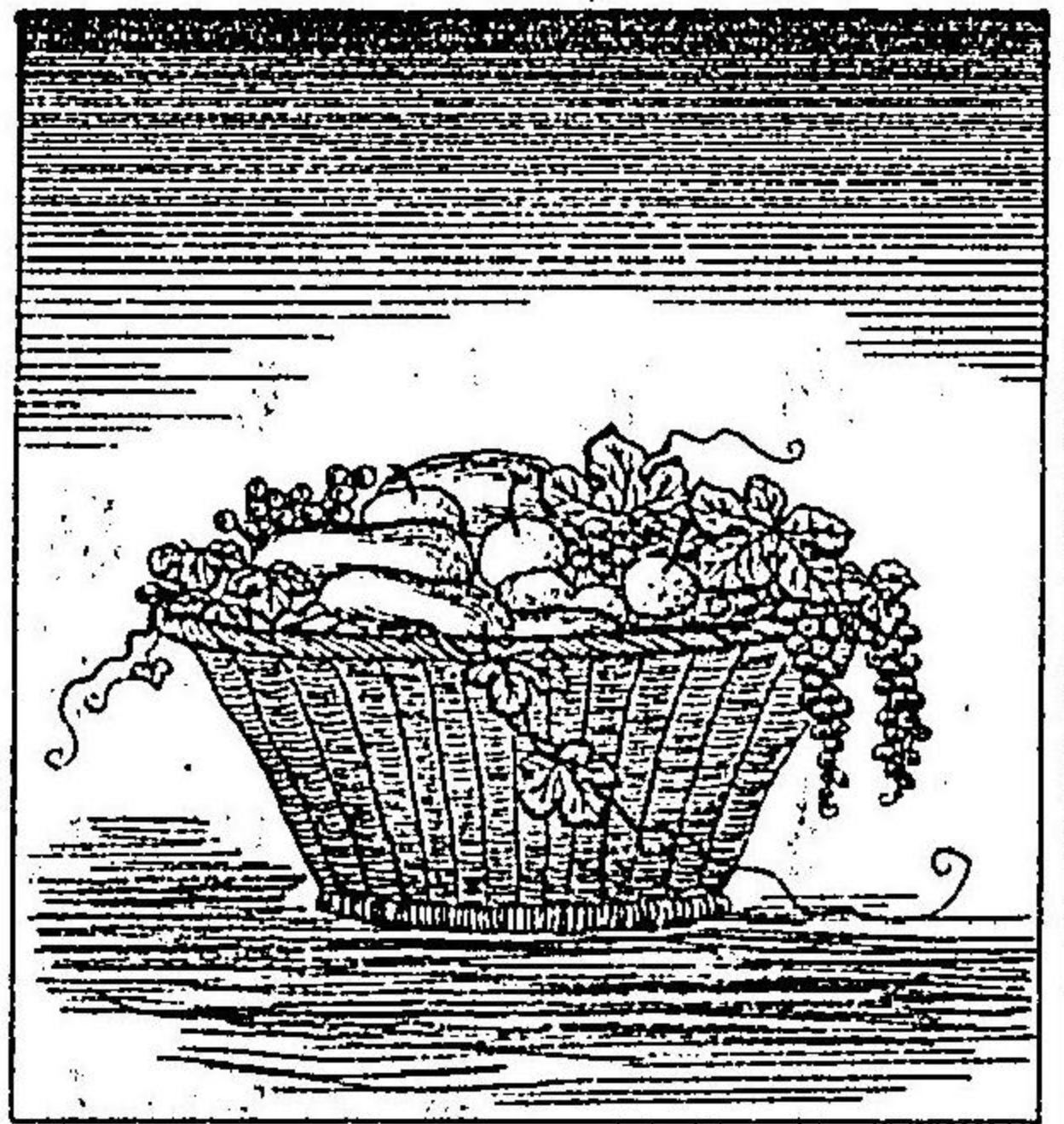
かし、○汝ら、此處に居る、三人の男を見とりや、○  
 又彼等の、捕へたる、數多の魚を見れば、○海中の、  
 魚は、其種類、多くして、大なるものと、小なるもの  
 と、良きものと、良からぬものと有り、○一人の男  
 を、小よりして、良からざる魚をば、取りて、海中へ、投  
 げ入まされ、○一人は、大なる魚を、籠へ、入るゝ所  
 をり、○入まされ、魚の、此籠に満ちたるとき、我  
 り家へ、持ち歸るあり、  
 此地を、何知ある處と、思ふぞ、○花園あり、○此處  
 へ、數多の、美しき、花有り、○左の手へ、鎌を持ち、右



花を折り、又果を取るべりらず、

の手へ、帽を持ち、さる、小兒  
 あり、小兒の後へ、杖を持ち  
 たり、娘あり、○汝ら、此園を、  
 此小兒と、娘との為へ、設け  
 たる所なりと思ふ、○又  
 この小兒等を喜びて遊ぶ  
 と、思ふ、○一人の娘へ、瓜  
 を、入まされ、籠を持ち、○  
 汝ら、花園へ、遊ぶとき、漫へ、

爰も果を摘み入るる籠あり、○この果へ、葡萄と、梨子あり、○籠の外は掛りたるへ、葡萄の蔓あり、○其影へ、籠の左に在り、然るに大陽へ、何れの方より、ありといふことを、知りや、○大陽へ、籠の右より、ありべし、此畫へ、日の出の景色なり、○今日へ、晴まらば、天氣ゆるく、啼く鳥へ、木より木へ、飛び遷る、○草は青々として、葉は露を、帶り、○數多の農夫も、野

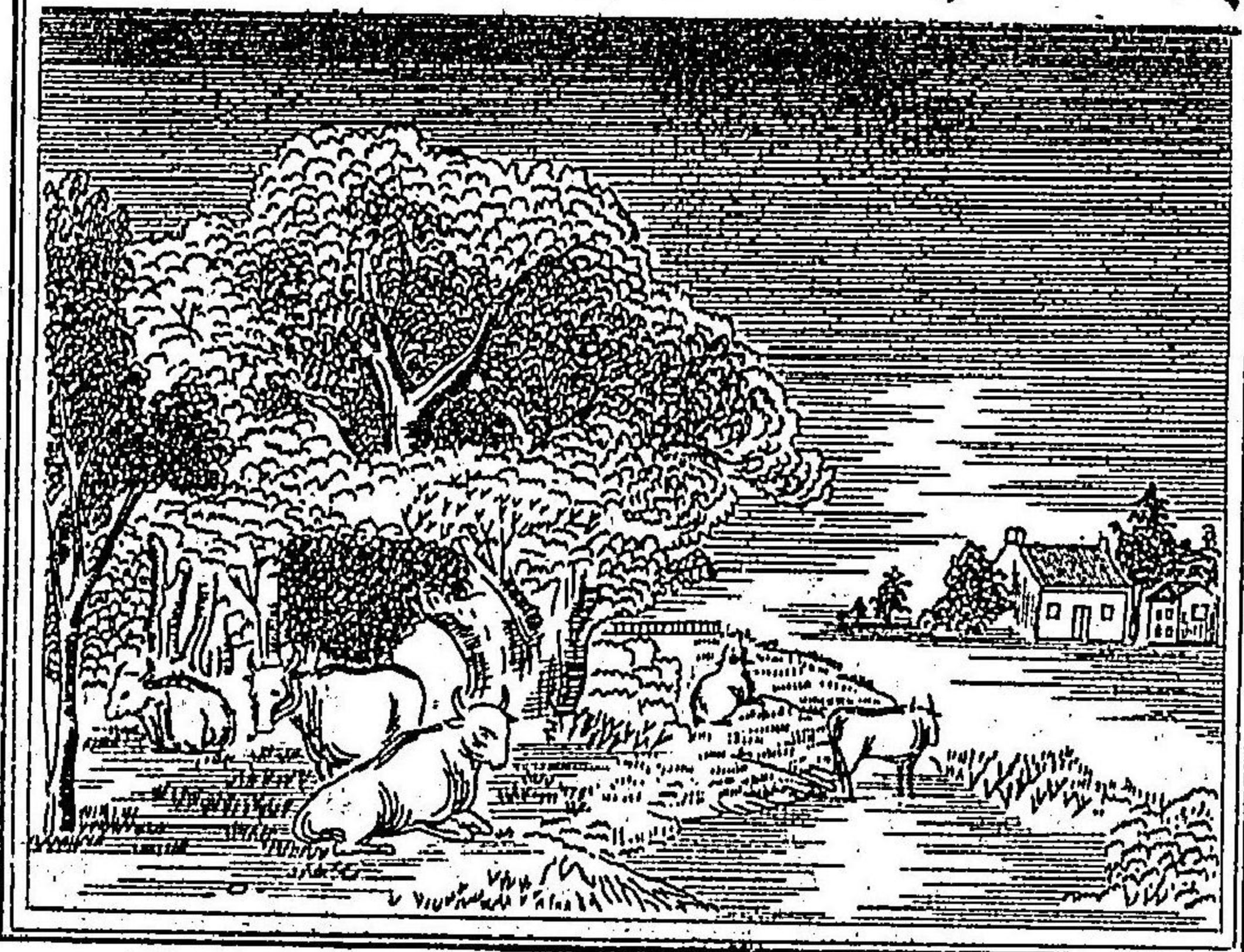


陽の照らに處へ、甚熱し、然るども、樹の蔭へ、較涼

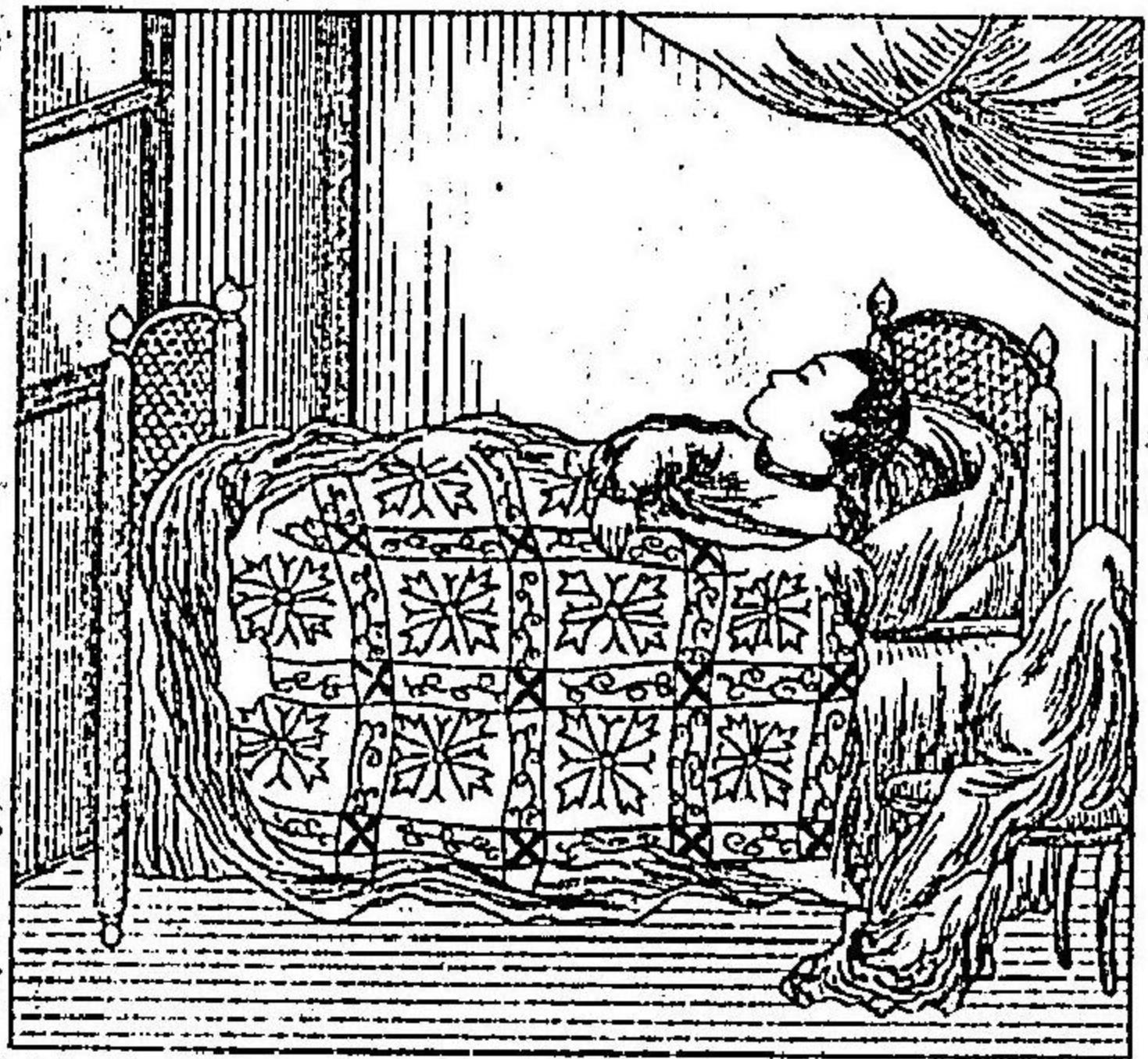
ま出て、或は畠を、耕し、或は草を、刈り、○農夫へ、晴まらば、日よ、必野に出て、働くもの、知るべし、晴天は、働り、されば、霖雨に、遇ふとき、耕すことを、得ば、穀菜を、得ることな



一きゆるる、臥したる牛と、  
 立ちとる牛あり、○又一匹  
 の牛へ、熱さを、消せんが為  
 一、河へ行きて、水を飲まん  
 とす、○河の上へ、橋あり、○  
 人も日中もありとるゆゑ、  
 皆、晝飯を、食ふる為、一、家へ  
 歸きり、  
 日暮、なりたり、○人へ、野  
 より、歸り來り、牛も、庭へ  
 入



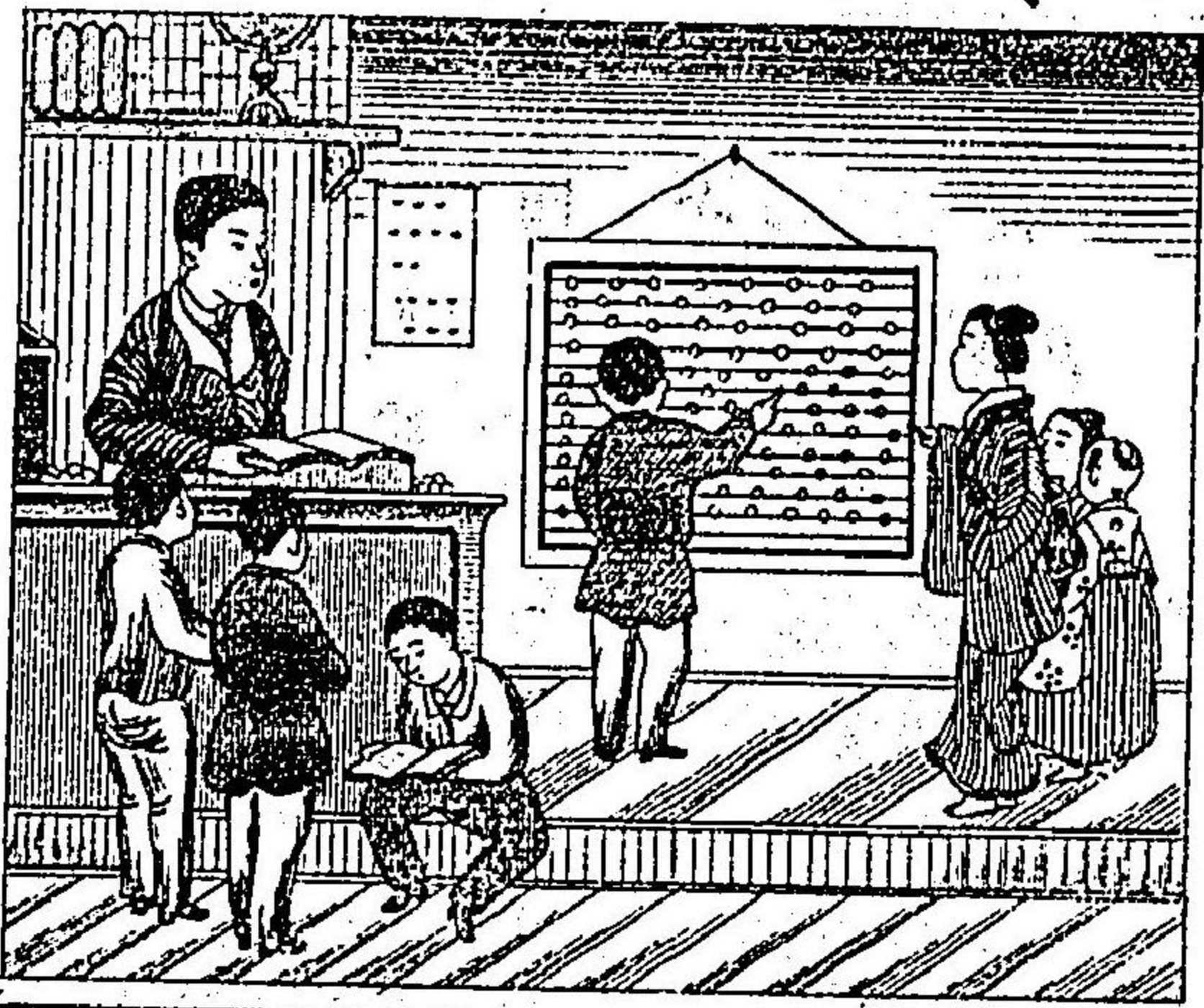
一、一人の女へ、庭へ出で  
 て、牛の乳を、弄り、桶へ、満と  
 りめて、これを、牛酪と製せ  
 んと云、○此時、男子へ、晝間、  
 芟りたる草を、積み、又干し  
 置ける、穀を、収めんが為、一、  
 極めて、忙し、今日も、一務を、  
 果さざる、ときも、明日の業  
 一、妨り、るがゆゑあり、  
 神へ、常、一我を守らゆゑ、一



吾も、獨りて、暗夜に、歩行するを、恐るゝことな  
 り。○又、眠りさるときも、神  
 の、守りあるゆゑ、暗き所も、  
 恐るゝことなり。○神は、暗き  
 所も、明し、見るものゆゑ、人の  
 知らざる所も、思ひて、假まも、  
 惡しきことをなせば、忽、罰を  
 蒙らざるなり。○人の、知らざる  
 ことを、神も、能く、知るゆゑ、善  
 まむのよ、幸  
 を、與へ、惡しきものよ、禍を、與  
 ふるなり。

第七

汝ハ物を數へ得るなり。○父も  
 一、汝も、十一の、林檎を、與へて、  
 母も、まゝ五の、林檎を、與へて、  
 るときも、幾箇の、林檎を、得  
 りと、思ふや、○十六の、林檎お  
 り。○然り、汝等も、物を、數ふる  
 ことを、學ぶべし。○大なる數  
 と、小き數とを、知るべし。○汝  
 も、石盤、又ハ、紙に、數字を、書得  
 るなり。○七の、數字を、



書し得ずば、務めて、これを、書くことを、學ぶべし、  
 ○物の數も、知らざるも、愚人なり、



盆の上、十一の、梨あり、この中、  
 母へ、三持ち去まり、然らば、残り  
 たる、梨子へ、幾箇とあまりや、○  
 残りたるへ、ハッあり、

汝等へ、文字を、書き  
 得ざるも、書状を、入し、贈  
 ること能はず○このゆゑ、



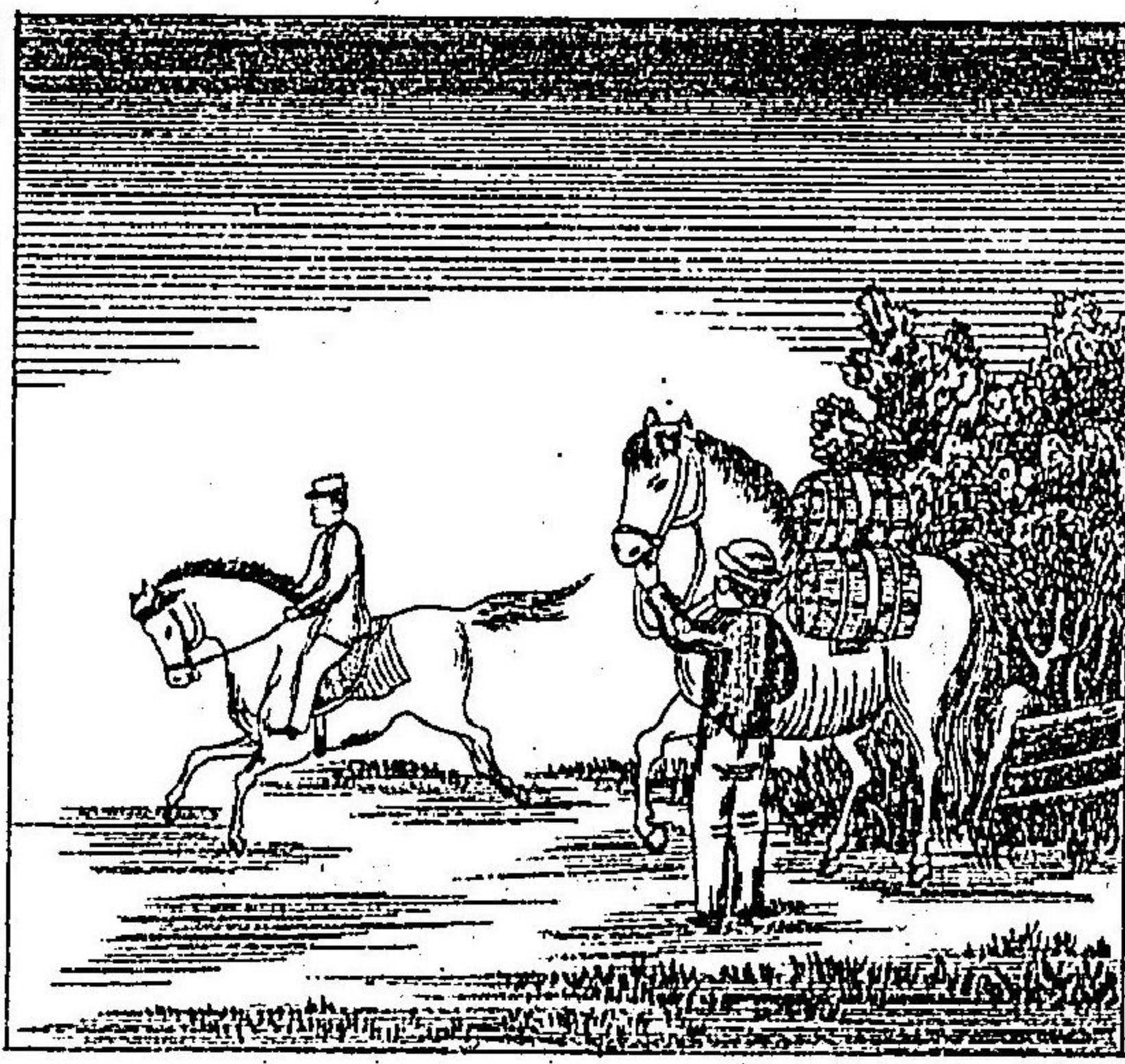
汝等へ、文字  
 を、書き得るか、○文字を、書き

汝等へ、文字を、書くことを、學ぶべし、



汝等へ、文字を、讀み得る、  
 ○文字を、讀むことを、知ら  
 ざれば、人より、贈りたる、書  
 状をも、讀むこと能はず、○  
 又書籍を、讀む得ざるも、  
 事を知ること能はず、○  
 事を知らざる人へ、縦才可  
 り、雖用すへ、適せざる事  
 ○ゆゑ、文字を、讀むこと

とを、知らざる者を、同ト、愚人といふなり。○さ  
 れバ、汝等ハ、務めて、文字を、讀むことを、學ぶべし。  
 馬ハ、實用ニ、適すべき、畜類  
 あり、陸地ニ於て、荷物を、運  
 ぶニ、馬無くてハ、不便なり、  
 ○馬ハ、畜類の、大なるもの  
 にて、顔、長く鬣有り、○背の  
 上ニ、荷を負ひて、速きニ、輸  
 送もあり、人を載せて、速  
 走もあり、又車を引くも



あり、  
 牛も馬と、同ト、實用ニ便ある、畜類ニ、  
 車を引き、又ハ、荷を負  
 ひて、速きニ、輸送も  
 あり、○されども、牛ハ、  
 人を乗せて、走ること  
 能はず、○牛の肉ハ、食  
 物とありて、能く滋養  
 をなし、又牝牛よりハ、  
 乳汁を、擠り取ること



を得るなり、



汝の着たる衣服ハ、何といふ織物ありや、○上衣

ハ、糸織よりて、羽織ハ、

黒羅紗なり、○汝ハ、絹

と、木綿と、羅紗の中又

何を、尤暖なるもの

と思ふや、○羅紗ハ、毛

織ふまバ、第一又暖な

り、其次を木綿と比、絹

と、又其次なり、

爰又、白き、單衣と、紺色の單衣あり、○汝ハ、何を、  
暖なりと、思ふや、○白き  
色ハ、太陽の熱を、引くこ  
と、少きゆゑ、夏ハ、涼し  
と雖、冬ハ、寒し、○紺色ハ、  
太陽の熱、通ひ易きゆゑ  
又、冬ハ、暖なりと雖、夏ハ、  
暑し、○人々、夏ハ多く、白  
衣を着、冬も多く、紺色の  
衣裳を着るハ、この理よりてなり、



爰一、二枚の圖あり、皆人の、働く状を、畫けり、○初



の圖ハ、田ま下  
だりて、秧を植  
るどころあり、  
○この人ハ、肘  
も、脛も、露ませ  
り、これ働くと  
便なるがゆゑ

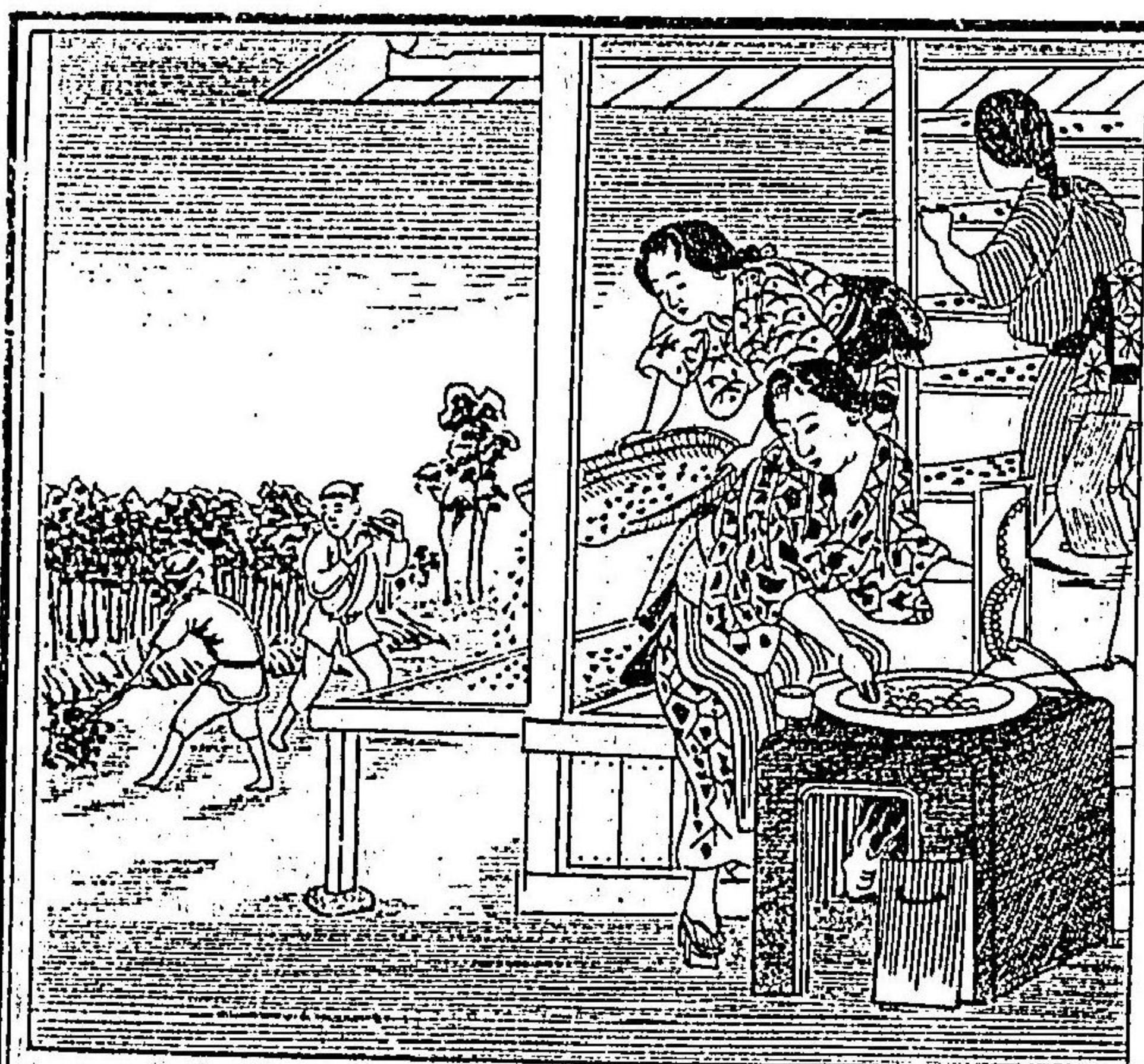
なり、

次の圖ハ、稻を刈りて、我家一、持ち歸る所なり、○



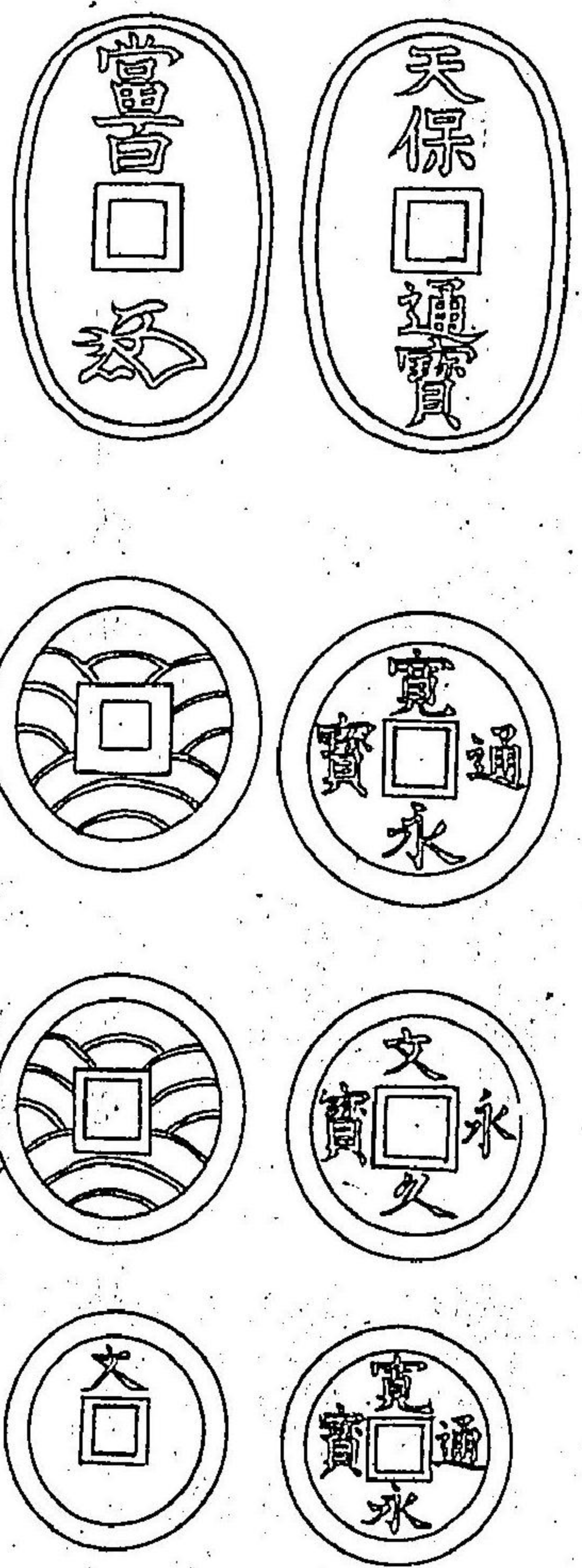
又稻を拵きて、  
米を取る所を  
見るべし、○此  
人々の、衣ハ、汗  
濡ひて、乾く  
ときふし、○農  
夫も、此の如く、

働くざれば、穀物を、得ることなし、○汝等穀物を、  
食する毎一、農夫の、苦勞を想ひ、粒々、皆辛苦より、  
出でたるを、知りて、其業を怠るべからば、

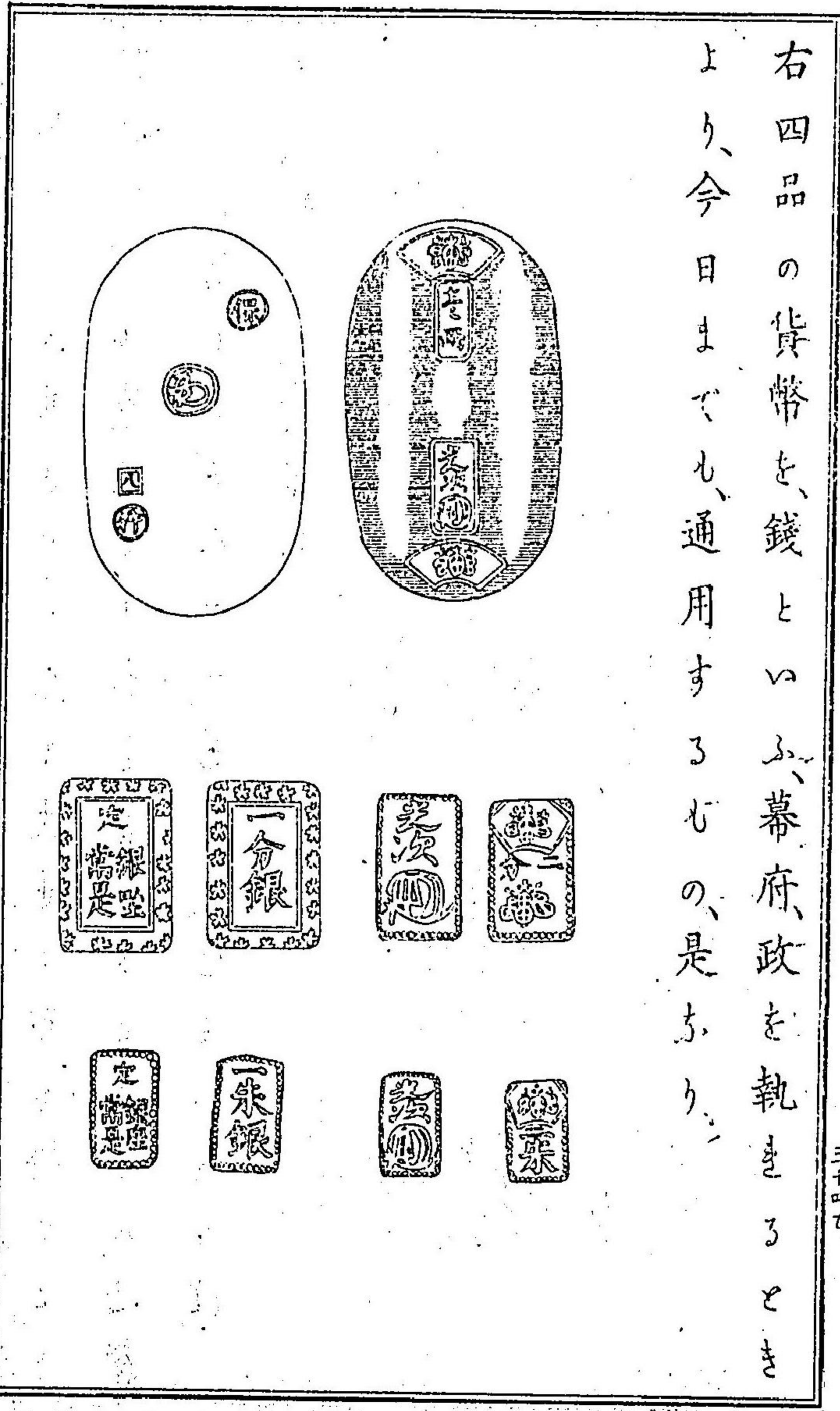


これハ、蠶を養ひ、絲を繰る所なり、○數多の女、皆朝早く起き、夜中までも眠らざりて、髪も結もせず、日々息ふ間も、働けり、○又二人の男あり、桑を採る所あり、○此男も、野に出でて、耕す人と、同じく、肘も脛も露も、力も盡し、働けり、○此の如く、數多の男女の、苦勞す

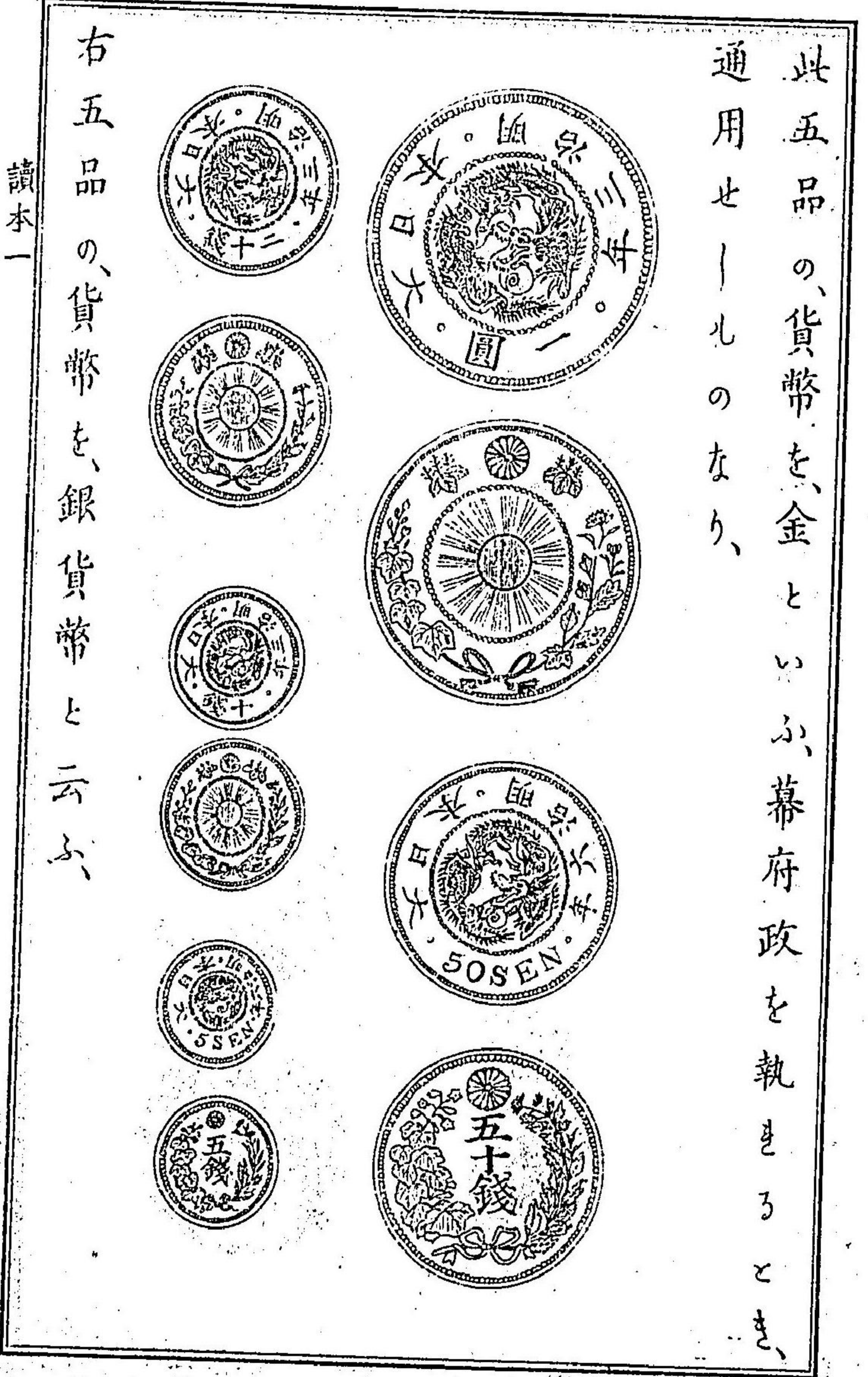
て、製するも、非ざれば、糸も生ぜず、絹も得ること能も、○汝等、暖なる衣を、著たるときは、必蠶を養ひ、絲を取る人々の、苦勞を、忘るべからば、爰も、種々の、貨幣あり、



右四品の貨幣を、錢といふ、幕府政を執るときより、今日までも通用するもの、是なり、



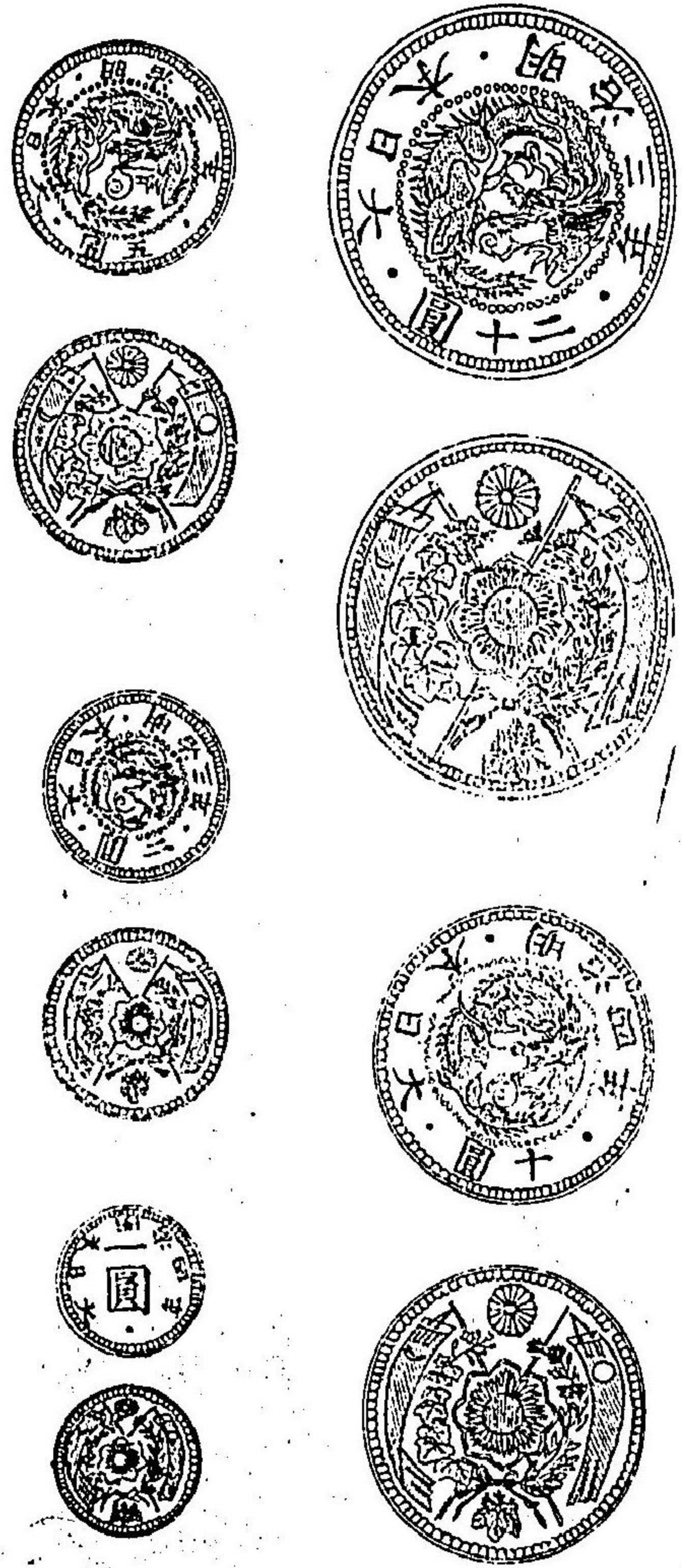
此五品の貨幣を、金といふ、幕府政を執るとき、通用せしものなり、



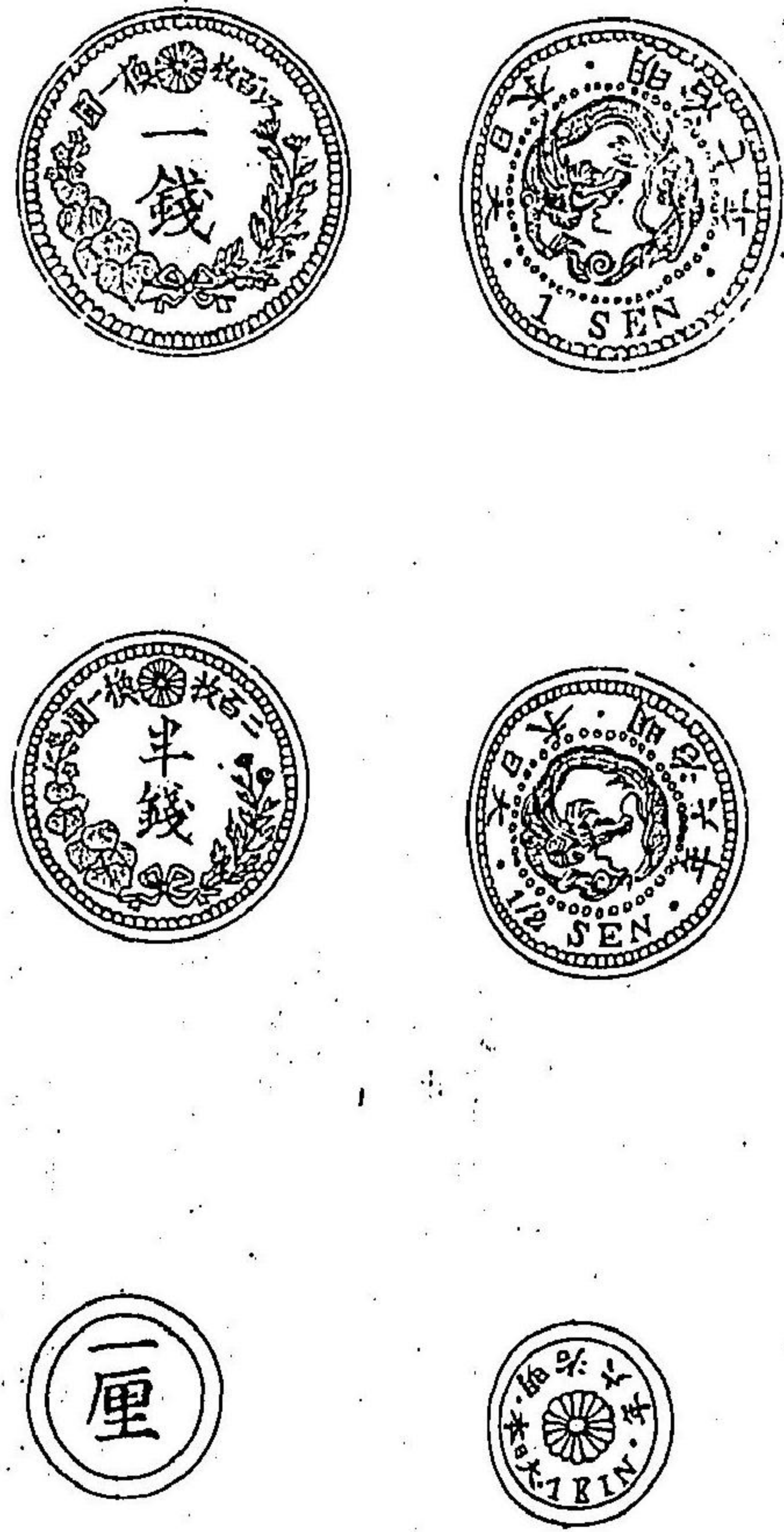
右五品の貨幣を、銀貨幣と云ふ、



右五品の、貨幣を、金貨幣と云ふ、



右三品を、銅貨幣と云ふ、  
此三種の、貨幣ハ、朝廷の、發行ヌテ、當今の通用ナ



り、  
小銅錢、一箇を、一厘といひ、十厘を、一錢といひ、百  
錢を、一圓といふ、故に、十二錢半を、金貳朱に當  
り、二十五錢を、一分に當り、五十錢を、二分に當  
るとなり、

小學讀本第一終

驚	穴	脫	嚮	應	度	說	敬	壯	年
毫	不	自	由	矇	頭	倚	譬	時	候
萬	物	概	經	木	理	增	希	外	面
無	難	賜	恙	恩	謝	祈	第	六	海
瓜	摘	掛	影	景	色	啼	遷	農	夫
耕	芟	働	霖	雨	照	陰	較	臥	消
牛	酪	製	忙	暗	夜	假	罰	蒙	禍
第	七	愚	人	盆	書	狀	贈	縱	適
畜	類	陸	地	荷	物	不	便	鬣	負
養	北	牛	乳	汁	織	物	單	衣	秧
汗	濡	苦	勞	想	粒	辛	苦	纒	纒
幕	府	代	政	銀	貨	幣	銅	朝	廷
								發	行
									貨
									幣
									輸
									滋
									與

小學讀本翻刻御届

明治九年十二月十五日

小學讀本釋文御届

明治十年三月八日

小學讀本翻刻人  
全釋文編輯人

橋爪貫一

第四大區三小區  
小石川大門町三十六番地

兩 點 子 卽 卽

空 谷 傳 聲	墨 悲 絲 漆	知 過 必 改	蓋 此 身 髮	遐 邇 壹 體	平 民 伐 罪	龍 師 火 帝	劍 斨 巨 關	閏 餘 成 歲	天 地 玄 黃
虛 堂 習 聽	詩 讚 羔 羊	得 能 莫 忘	四 大 五 常	率 賓 歸 王	周 發 殷 湯	烏 官 人 皇	珠 稱 夜 光	律 召 誦 陽	宇 宙 洪 荒
禍 因 惡 積	景 行 維 賢	罔 談 彼 短	恭 惟 鞠 養	鳴 鳳 在 樹	坐 朝 問 道	始 制 文 字	果 珍 李 奈	雲 騰 致 雨	日 月 盈 昃
福 緣 善 慶	克 念 作 聖	靡 恃 己 長	豈 敢 毀 傷	白 駒 食 場	垂 拱 平 章	乃 服 衣 裳	菜 重 芥 薑	露 結 為 霜	辰 宿 列 張
尺 璧 非 寶	德 建 名 立	信 使 可 覆	汝 慕 貞 烈	化 被 草 木	愛 育 黎 首	推 位 讓 國	海 鹹 河 淡	金 生 麗 水	寒 來 暑 往
寸 陰 是 競	形 端 表 正	器 欲 難 量	男 效 才 良	賴 及 萬 方	臣 伏 戎 卷	有 虞 陶 唐	鱗 潛 羽 翔	玉 出 崑 岡	秋 收 冬 藏



特  
4

081656-001-5

特26-466

小学読本

田中 義廉 / 編

M9, 10

D·A·C-6465

